1973年11月20日発行
共産主義者同盟（RG）
第14号　100円　発行人　野村　忠

赤報

スターリン主義打倒、反スタマルクス主義止揚、革命的マルクス・レーニン主義復権の旗を更に高く揚げ、国際非合法党を建設せよ！

＜目　次＞

■ 誤った「史的唯物論」による『資本論』の歪曲を批判する（上）――川島君の批判への回答――　1〜4面
■ スターリン主義に屈服した革共同革マル派の戦術の批判（中）　5〜8面

誤った「史的唯物論」による『資本論』の歪曲を批判する（上）

川島君の批判への回答

はじめに

日本共産党（革命左派）神奈川県常任委員会の職長である川島蔵君は、「ブンド系諸君の「唯物史観」「資本主義批判」「共産主義」は間違っていることを明らかに」するために、長大な論文を発表した。

最近序章社から発行された、日本共産党（革命左派）神奈川県常任委員会編集の「銃撃戦と〝粛清〟」に掲載されている「再びブンド系諸君を批判する――真の革命路線をかちとるために――」という論文がそれである。

われわれは、一九六九年以来、獄中にあり、政治活動における大きな制約を受けながらも、この間の共産主義者同盟諸派の党内闘争党派闘争を研究し、とりわけ、われわれ共産主義者同盟（RG）の思想と路線を真正面からとりあげてこれを批判しようとしている川島君の努力に敬意を表したい。

だが、川島君の努力と、彼の我々に対する批判の正しさとは別問題である。我々は、川島君の批判は全く的はずれであり、彼の資本主義批判もまた誤りであると考えている。したがってここに我々の回答を準備し、川島君の再考をうながしたいと考える。

もちろん、我々がこれから開始しようとしている日共革命左派の諸君との論戦は、国際共産主義運動の綱領の原則を構成する諸問題をめぐるものであり、レーニン死後のロシア共産党内闘争以降、一貫して継続してきた論戦を引き継いだものであって、この論戦の歴史の中で、我々と日共革命左派の諸君とは思想的な系譜としては相互に全く対立する立場に立って党建設を行なってきた以上、当初は的はずれの議論が生じることは避けられない。

だが、そうである以上、なおさら我々がこの諸君と論争することは今後の革命戦争の発展にとって重要な意義を持っており、我々はできるだけ系統的に論戦を組織することによって、革命戦争を荷うべき労働者階級の党派性をより一層強固なものにしてゆきたいと考えているのである。

（注）「銃撃戦と〝粛清〟」において川島論文とあわせて掲載されている渡辺正則君の「権力の観点をしっかり把握しよう」という論文についても、我々は回答を準備している。渡辺君の人民民主主義革命に関するいくつかの主張は反米愛国路線の破産を如実に示すものであって我々は容易に反論できる。だが連合赤軍の総括については、最近において明らかになってきた様々な事実もあることであり、また日共革命左派ばかりでなく他の諸君からの偏見に満ちた、我々の総括に対する批判もこの間行われているので（例えば高原君からの批判。だが、高原君は中央集権主義の組織思想を理解できず、単に組織形態だけを議論していることによって、結局のところ、自分の個人的感情を抑えることができず、森君に対する個人的中傷を行っている）我々は入手しうる限りの全ての資料にもとずいて、我々の態度を再度くわしく明らかにするつもりである。

しかし、渡辺論文における連合赤軍の総括についての主張に対しては、我々は我々の基本的な総括の観点において譲ることはできない。すなわち、我々は連合赤軍を一つの政治組織として、綱領・組織・戦術のすべての分野にわたって総括しようとしており、何よりも中央集権主義の組織思想にもとずいて総括しようとしている。ところが、日共革命左派の諸君は、組織思想においては、結局のところ、官僚主義――個人独裁批判、党内民主主義の観点から、連合赤軍を総括しようとしていることである。この諸君は、今でも、「新党」派に対する反対派的立場を克服できていないのである。もちろん、明らかな我々の事実誤認――例えば七二年一月十一日付の連合赤軍指導部から川島君への手紙の第（9）項（レーニン「一同志に与える手紙」を承認するという趣旨を、川島君の批判に対して、連赤指導部が川島君に伝えている部分）に関して、我々が川島君の方がレーニン「一同志に与える手紙」を承認していないというように理解したことについては、我々は渡辺君の指摘を認め、卒直に謝罪の意を表するのにやぶさかではない。しかし、だからといって、我々は連合赤軍がその実践の上において、プロレタリア独裁の問題、中央集権主義の組織思想の問題に、非常に根本的なかたちでつきあたっていたという我々の観点を譲ることはできないし、その他の我々の連合赤軍総括の基本的な観点についても譲ることはできないということである。渡辺君は、我々が「論争以前のデタラメな作風」を持っているといっているが、果して、我々が、そのような「作風」を持っているのか、そうでないのか、日共革命左派の諸君は一体どうなのかは、今後の論戦の結果によって示されるであろう。例えば、ここで明らかにする川島論文批判によっても。

第一章　川島式史的唯物論は現実の歴史を明らかにしえるものではない

第一節　川島君はスターリン主義に対する態度はあいまいにしている

われわれは、まず川島君のわれわれに対する批判が、的はずれに終っていることを明らかにすることからはじめよう。

川島君とわれわれとの根本的な対立点は、われわれの言葉では「唯物史観」、彼らの言葉では「史的唯物論」の把握をめぐって形成されている。川島君が展開しているわれわれの資本主義批判に対する批判も、この「唯物史観」――「史的唯物論」の把握の相違によってもたらされたものである。したがって、川島君の論文の第一章は詳しく検討されねばならない。（川島君はその論文の第一章で、史的唯物論をあつかい、第二章で資本主義批判、第三章で共産主義をあつかっている。）

川島君は、論文全体の序文である「はじめに」で、論旨を次のようにまとめている。

「この小論で、ブンド系諸君の『生産力と生産関係の矛盾を捉えることは誤りである』という見解は、マルクス・レーニン主義の史的唯物論の修正であることを明らかにする。そして、このうえに立って、「〝資本主義的生産様式の基本矛盾は社会的生産と資本主義的私有の矛盾であり、これはプロレタリアートとブルジョアジーの対立として現われる〟というのは間違っている」という彼等の見解は、マルクス経済学の修正である事を明らかにする」（P二四一）

このまとめのなかで、川島君はブンド系諸派は、「生産力と生産関係の矛盾を捉えることは誤りである」したがって「「資本主義的生産様式の基本矛盾は社会的生産と資本主義的私有の矛盾であり、これはプロレタリアートとブルジョアジーの対立として現われる」というのは間違っている」という見解をもっていると考えており、そして、第一章、第二章で、この考え方を批判している。

川島君は、「ブンド系諸派」のどれかの論文から引用してきた如く、この「ブンド系諸派の見解」なるものに、カッコをつけており、ブンド系諸派の論文に、あまり接していない人々に対してあたかもブンド系諸派が、川島君の言うようなかたちでの唯物史観に対する把握を行なっているかのように思いこませようとしている。

だが川島君がカッコをつけて示したこのふたつの思想は、われわれの見解とは無縁であり、川島君自らが、勝手に、この思想をわれわれの見解だと創作したものに他ならない。

何故川島君は、われわれの思想とは無縁なしろものに、わざわざ引用符であるカッコをつけて、あたかもわれわれが、どこかで語ったかのように仕立てあげねばならなかったのだろうか。この真の理由は川島君自身に聞く他はない。だが、こうした不当なとりあつかいを受けたわれわれとしては、当然にも、この真の理由について、せんさくする権利を有するものと考える。

さすがの川島君も、無から有を生むことは出来ない。だから彼は第一章第一節で、われわれの論文からの引用を行っている。ところが彼は、その引用を公明正大に行うのではなく、自分の主張に都合のよい部分のみを取出している。

それゆえ、われわれをも、川島君が「生産力と生産関係の矛盾を捉えるのは誤りである」という「ブンド系諸派の見解」なるものを導きだして来た引用部分を、川島君が引用に際して省略した部分（＜＞で示しておく）も含めて、以下に示しておく事にする。

「スターリンは、＜社会発展の法則を史的唯物論に体系づけ、この上にたった法則からの実践的結論、社会的観念に立脚するものとして党とその実践の基準を位置づけ、＞史的唯物論を『生産』から語り、経済学教程と生産力―生産関係の矛盾の歴史的法則というふうに客体の平板化―固定化して捉えるのだが、これは＜観念的歴史観に対し、＞マルクス・エンゲルスが歴史の三契機を、生きた人間の生存を前提とした物質的生活の生産と繁殖、その欲望の産出として歴史の内容を分析し＜『哲学者は世界を解釈してきた。だが肝心なことはこれを変革することである』とし、『私有財産の積極的揚棄』としての＞共産主義を深化させ、経済学批判において、この私有財産・労働を資本の生産過程として分析し、所有と労働の分離の法則的解明として、『資本論』において資本の運動法則の解明から共産主義革命の物質的諸条件を明らかにし、プロレタリア独裁・共産主義の第一段階を基礎づけ、インターナショナルを打ち鍛えたことと真向から対立するものである」（『蜂起』六号P三三）

この部分（もちろん、川島君の引用したものには＜　＞の部分が省略されている）を引用したあと川島君は次のように言う。

「つまりブンド系諸君によれば『史的唯物論を〝生産〟から語り……生産力―生産関係の矛盾の歴史的法則……として捉える』のは『マルクス・エンゲルス……と真向から対立するもの』だということである」（P二四二）

そしてこのあと、川島君はマルクスの『経済学批判』の序言、レーニンの『カールマルクス』マルクスの『クーゲルマンあての手紙』、エンゲルスの『空想から科学へ』から、各々引用し、その引用句の間に、「これをみれば『生産力と生産関係の矛盾を捉えることは誤り』という主張はマルクス・レーニン主義の史的唯物論の修正

≪必読論文≫

■ 『歴史と階級意識』の批判（上）
榎原　均（序章10号）

■ 『歴史と階級意識』の判批（下）
榎原　均（序章11号）

■ 日本共産党党内闘争史
－その社会帝国主義への転落の根拠－
駒井　三郎（序章12号）

■ 反スターリニズム運動の総括の視点
共産主義者同盟（RG）『赤報』編集委員会
（序章12号）

年末一時金カンパの要請

全国の「赤報」読者、労働者諸君に、年末一時金カンパを要請します。

我々共産主義者同盟（RG）の党建設と革命戦争派再編の事業はいまだ途上にあるものでありますが、しかし、この事業の成否に日本階級闘争の未来はかかっているようなものとして存在しています。

中東戦争、タイ学生革命、南朝鮮人民の反朴・反日帝闘争その他国際階級闘争は明らかに新たな昂揚を開始しており、またチリの軍事クーデターは、武装闘争の道以外に人民革命の勝利の道はありえないことを示しました。日本帝国主義によってますます強化されている金融寡頭制支配をうちやぶり日本帝国主義のアジア侵略、反革命戦争にむかう歩みをうちやぶる道もまた労働者階級の断固とした革命戦争の組織化による共産主義革命の勝利の道以外にはありません。我々は日本共産党宮本一派による民主連合政府の主張や社会党による国民連合政府の主張を断固として拒否し、それと闘って進まなくてはなりません。

全国の「赤報」読者諸君、労働者諸君！我々は革命戦争の勝利をかちとるためには、何よりも強固な革命党を、革命的マルクス・レーニン主義にしっかりともとずいた労働者階級の前衛党を建設しなくてはなりません。

我々はこの事業の遂行のために多くの資金を必要としています。労働者階級の経済的解放のために、何物にもまして革命党の建設を重んじる読者諸君、労働者諸君の最大限の年末一時金カンパを要請します。

共産主義者同盟（RG）

以外の何ものでもないことがはっきりする」（P二四三）とか「すなわち、マルクスは『生産』から語っている。ブンド系諸君の主張によれば何とまたマルクスは間違っていたことになる！エンゲルスも次のように『生産』から語っているから間違っていることになる！」（P二四三）とか「レーニンも次のように『生産』から語っているから間違っていることになる！」（P二四四）といった文句をはさみこみ、「ブンド系諸君の主張は、とんでもないたわごとであることがわかる」（P二四四）などと言っている。

川島君は文筆家としてなかなかの手並みを発揮した。ブンド系諸派の主張は「とんでもないたわごと」であることを証明したのだから。だが現実には、ブンド系諸派は、どの部分で「史的唯物論を『生産』から語るのは誤り」などという「とんでもないたわごと」を言っているのだろうか？　川島君は主張する、『査証』六号P三三をみたまえ、と。

われわれも読者と共に、この問題の部分を検討する事にしよう。『査証』六号三菱論文のこの箇所は、川島君が省略した最初の部分を復元すれば（それは先に示しておいた）、スターリンの思想の批判がなされていることがはっきりする。その引用部分よりも前の部分では、スターリンの「弁証法的唯物論はマルクス・レーニン主義党の世界観である」（「弁証法的唯物論と史的唯物論」）という命題を批判し、そしてこの引用部分では、この批判をひきついで、スターリンの史的唯物論の内容を批判したものである。

だから、われわれは、ここで、「史的唯物論を『生産』から語るのは誤り」といった「とんでもないたわごと」を主張しているのではない。この箇所では、史的唯物論一般が検討されているのではなく、何かしら、新しい史的唯物論の体系を作ろうとする試みが行われているのではない。まさにわれわれは、「スターリンの史的唯物論」という、具体的歴史的に存在してき、プロレタリアートに影響を与えてきた理論を批判しているのである。

それゆえ、ここに出てくる生産という言葉には「生産」として、わざわざカッコ付きで示し、スターリンの生産に対する考え方が格別なものであることを示しておいたのであった。われわれは、史的唯物論一般を、生産から語ることが誤りだということを主張しているのではなく、スターリンが、史的唯物論を、スターリン独自の、「生産」概念から体系ずけていること、すなわち、スターリンの史的唯物論とスターリンの生産についての経済決定論的な、客観主義的な、思想が問題にされているのである。（なお、この引用部分が依拠しているのは、『共産主義』十五号「スターリン主義解体のために」である。）

われわれが、『査証』六号P三三において「スターリンの史的唯物論体系」を問題にするのではなく、「史的唯物論一般」や「唯物史観の公式」について問題にしていたとすれば、それは、川島君の言う「とんでもないたわごと」であっただろう。だがわれわれが、「史的唯物論一般」や「唯物史観の公式」について論じておらず、「スターリンの史的唯物論」について論じていることは明らかであり、それゆえ川島君が「たわごと」だと考えている「ブンド系諸派の見解」なるものは、彼自身の勝手な創作物でしかなかったのであった。

たとえば、川島君が、「ヘーゲルの弁証法は観念論であり、間違っている」という正しいことを語ったとしよう。われわれがそれに対し、「川島君は『弁証法は観念論であり間違っている』と主張している」と批判したとしよう。川島君は、きっと、「ヘーゲルの弁証法」が間違っているのであって「弁証法一般」が観念論であると主張したのではないのであり、そのような批判は的はずれだと言うであろう。川島君は、丁度、こうしたやり方でもって、「ブンド系諸派の主張はとんでもないたわごと」であることを証明したのであった。川島君が的を得た批判を意図しているならば、批判すべきわれわれの思想を正しく把握してから矢を射るべきであった。

さらに、先の引用箇所そのものが、「史的唯物論を生産から語るのは誤り」といった見解が、われわれの見解と一致するものでないことを示している。われわれは、スターリンのカッコ付き「生産」概念を批判したあとで「これは観念的歴史観に対し、マルクス・エンゲルスが歴史の三契機を生きた人間の生存を前提とした物質的生活の生産と繁殖、その欲望の産出として歴史の内容を分析し」（問題の部分、傍点は筆者）というように、マルクス・エンゲルスが、唯物史観の観点から歴史を分析する際に、生産の分析からはじめていることを何ら否定していないのである。

以上で、われわれは、川島君の批判が的はずれであり、川島君の言う「とんでもないたわごと」はわれわれの見解とは無縁な川島君自身の勝手な創作物でしかないことを明らかにした。川島君は、自分勝手に「的」を作り、それを、「ブンド系諸派」の見解であると宣言し、それに向かって「矢」をはなっている。

われわれは、こうした「的」のすりかえを、川島君が故意にやっているとは考えない。いやむしろ川島君が的をしぼれなかったこと自体のなかに、日本共産党（革命左派）神奈川県常任委員会の深刻な問題がはらまれていると考えている。川島君が、われわれに対して的をしぼれなかった最大の原因は、川島君がスターリン主義に対する態度を避けているところにある。

川島君がわれわれの「スターリンの史的唯物論」の批判に対し、的をしぼるためには「史的唯物論一般」を擁護することではなく、文字通り「スターリンの史的唯物論」を擁護することが必要であった。そうでなければ、「スターリンの史的唯物論」に対する一定の批判を表明した上で議論すべきであった。

川島君は「スターリンの史的唯物論」そのものには誤りを感じつつも、それを定式化しえず、またスターリンの擁護も出来ないがゆえに、われわれの「スターリンの史的唯物論」への批判を、無意識のうちに（無意識的なのかそれとも意識的なのかについては川島君自身自身に直接聞いてみればわかることだが）「史的唯物論一般」への批判と受けとり、その結果、「とんでもないたわごと」の「的」をつくりあげ、マルクス・エンゲルス・レーニンの唯物史観の定義でもって、われわれに反論を試みたのであった。

川島君は、スターリンの誤りに気づきつつも、それを明確に定式化することが出来ず、その結果、われわれの「スターリンの史的唯物論」に対する批判が、「史的唯物論一般」の批判であるかのごとく見え、マルクス・エンゲルス・レーニンの唯物史観の定義に依拠してわれわれに反論を試みたが、このことは実は、川島君が、スターリンの思想を擁護していることに他ならないのである。大声ではなくて、おずおずと、スターリンの諸命題を部分的に修正しつつ。

我々に対する川島君の不当な態度を生みだした根本原因が、このような事情にあるとすれば、われわれは当然にも彼との論争を、スターリン主義に対する評価の問題を中心にすえることによって、川島君とかみ合った議論、生産的な論争が可能だと考えている。スターリンの「ソ連共産党（ボ）歴史小教程」をいまだ聖書あつかいにしている人々、いわゆる日本の毛派の流れに属する諸君と我々との論争では、当然にも相互にありうるところの一定の先入観＝色眼鏡を避けることができないにしろ、もし我々と諸君とが革命戦争の旗を守ることにおいて一致した上で真に公明正大な論争に入ることができるとすれば、当初のすれちがいは、もはや問題にはならず、我々はこの諸君と系統的に了解をとげる事業の成功を期待してよいのである。

第二節　川島君の「宮本一味」に対する批判はデッチ上げである

われわれはすでに、川島君のわれわれに対する批判が、的はずれなものでしかないことを明らかにしてきた。党派と党派が論争を開始する場合、最初のうちは的はずれな批判に終始することは、大いにありうることである。

ところが、川島君の的はずれぶりは少々常識をはずれた方向へ発展している。彼は、われわれに対する批判において的はずれになっているだけではなく、日本共産党宮本一派に対する批判においても的をしぼりえていないのである。

川島君の宮本一派批判における的はずれぶりをみるとき、そこにあるのは、マルクス・レーニン主義党の理論闘争における科学的厳密さ、具体的・歴史的事実の検証といった、初歩的な作業を欠落させていることである。川島君は、全く一人相撲をとり、一人よがりに陥っている。われわれは、こうした川島君の理論闘争に対する態度が、われわれに対する的はずれな批判をもたらしたとは考えていないが、しかし宮本一派に対する川島君の批判の仕方を固執するようだと、今後の実りある論争は不可能であり、それゆえ、ここで、川島君の宮本一派に対する批判の誤りを明らかにすることによって論争を原則的な、かつ、正しい解決にむかって発展しうるものにするための手がかりの一つとしておきたい。

川島君は、宮本一派の史的唯物論における修正が、「労働＝生産」としている点にあるとし、「マルクス・エンゲルス・レーニンが『生産』と語っているところを、宮本一派は『労働＝生産』と解釈しているようである。つまり、ブンド系諸君の見解によれば、マルクス・エンゲルス・レーニン、スターリンは誤っており、宮本一味は正しいということになる！」（P二四七）と主張する。

川島君は、われわれの「スターリンの史的唯物論」に対する彼の批判の部分、（第一章第一節、第二節の㈠）においては、スターリンの「ス」の字もふれていないのに、この第二節の㈡の部分で突然マルクス・エンゲルス・レーニンに続いて、「スターリン」が登場するのには少々驚かされる。そもそも、この四人の革命家のうち、「史的唯物論」そのものについての本を書いているのは、スターリンただ一人であるにもかかわらず川島君は、史的唯物論を擁護している部分においてはスターリンを登場させず、マルクス・エンゲルス・レーニンからの引用ですませそして、この箇所でこっそりとスターリンを登場させることによって、スターリンは、マルクス・エンゲルス・レーニンと原則的に対立する理論を主張してはいないのだと何とか印象づけようとしているのである。

それはさておき、川島君は、宮本一派は、「生産」を「労働＝生産」と解釈することによって史的唯物論を修正しており、ブンド系諸派も、この点では宮本一派と同様であり、さらに、山口左派、木下一派についても「彼らもまた『労働＝生産』論をとっている」（P二四八）と主張するのである。

「実は、宮本一味のこの『労働＝生産』論こそ、史的唯物論におけるマルクス・レーニン主義の重大な修正なのである」（P二四七）という、川島君の「重大」な発見について、われわれもその論拠を考察することが必要である。

宮本一派は、六全協において、朝鮮戦争下での武装闘争路線を完全に清算し、この清算をどんどん合理化することによって、いわゆる反動的「自主独立」路線の下、「人民的議会主義」の道を歩んでいるところの、はっきりした社会帝国主義の潮流である。彼等は、彼等の十二回大会なるものにおいてプロレタリアートの独裁をプロレタリアートの執権へと修正することを中心とする「綱領の一部改正」を公式に行なおうとしていることにみられるように、骨の髄までの修正主義者であって、マルクス主義からの背教者の集団であり合法マルクス主義者集団である。

だが、われわれは、いまだ、宮本一派が、史的唯物論における生産を「労働＝生産」と解釈するというかたちでのマルクス主義の修正を提案したことを見た事はない。

そもそも、「労働＝生産」論は、宇野経済学及び、主体的唯物論の立場であって、これに対しては、宮本一派は、今日でも反対しているのである。しかし川島君は、宮本一派が「労働＝生産」論に陥っていることを発見する。一体どこで？

川島君が引っぱりだしてきたその論拠は、宮本一派の公式見解や日本共産党出版局の出版物、たとえば『共産主義読本』といったものではなく、なんと『マルクス・エンゲルス二巻選集』第六巻、一九五五年初版の、訳者の解説文である。

川島君が、この解説文に依拠して、宮本一派の修正を主張するためには、まず第一に、この解説文が、史的唯物論について書かれたものであるかどうかを検証し、第二に今日の宮本一派が、この解決文を支持しているか、ないしは、この解説文が書かれた時すでに、宮本一派が、その修正主義の理論を完成していたことを証明することが必要である。こうしたことは革命党の文筆家の最低の義務である。革命党において責任ある地位をしめている文筆家としてのこうした原則的な努力をしないならば感覚のおもむくところ、政治的必要のおもむくところに従って、理論をつくりあげる単なるデマゴーグ＝悪宣伝家への道が残されているにすぎない。

『序章』十二号、水谷論文においては、日共革命左派の諸君は、宮本一派の修正主義は、十一回大会で、理論的にも実践的にも組織的にも完成されたとしており（「序章」P一四〇）、この立場に立つならば、六全協前後に書かれたと思われる、マル・エン選集の訳者の解説文が、宮本一派の基本的な主張であるとすることは出来ない。今日の宮本一派の出版物のどれをみても、「労働＝生産」論などは登場していない。この解説文が今日の宮本一派の主張であるという証拠はどこにもない。

次にこの解説文の内容を検証することにしよう。川島君が引用している部分は次のところである。

「エンゲルスは、労働によって人間が動物から分化していった過程を、みごとに、深遠に叙述し、科学的な人類発生論をはじめてつくりだし、自然科学から社会科学への唯物論的な移行をなしとげている。これはダーウインのような、もっとも唯物論的な、進歩的な自然科学者をふくめて、従来の科学者がみなつまづいたところであって、彼らは、人間の発生にあたって労働が演じた役割を認識できなかったため、人間の思惟によって、人間の行為を説明する観念的世界観をぬけだすことが出来なかったか（一二八ページ）、でなければ、動物の群と人間の社会とを質的に区別するもの——労働＝生産——をみずに、生物学的法則—個体生存闘争——をそのまま人間の社会にひき写す機械論におちいったのである。）（『マルエン選集』六、P二八九）

川島君は、この解説文が、史的唯物論について書かれていると信じて疑わず、この引用にひきつづいて「すなわち、マルクス・エンゲルス・レーニンが『生産』と語っているところを、宮本一味は『労働＝生産』と解釈しているのである」と説明したのであった。

この解説文は、エンゲルスの『自然の弁証法』に含まれている論文『猿が人間になるについての労働の役割』について解説したものである。訳者は、この解説で、エンゲルスが「ところで、猿の群と人間社会とのあいだの特徴的なちがいとしてまたもやどういうものを見いだすか？労働である」（P一二三）と述べた部分について「でなければ、動物の群と人間の社会とを区別するもの——労働＝生産——をみずに……」というように解説している。

だから、訳者は、川島君の見解とは反対に、エンゲルスが「労働」と語ったところを、「労働＝生産」と解釈しているのであって、決して川島君が説明するように、エンゲルスが「生産」と語っている部分を「労働＝生産」と解釈しているわけではないのである。

そもそも解説文のこの部分は、史的唯物論（スターリンによれば社会の歴史に弁証法的唯物論をおし拡げたもの）について語られているのではなくて、猿から人間の社会が成立するまさにその移行過程が問題にされており、それは社会史ではなくて自然史の領域である。

さらにまた、この訳者は、同じ解説文の別の部分で、『空想から科学へ』の解説を行っており、そこでは史的唯物論にふれて次のように語っている。

「第三章では、エンゲルスは、マルクスの『資本論』にもとづいて、資本主義的生産様式の発生と発展の行程を略述し、資本主義の基本方向である生産の社会的性格と取得の私的資本主義的形態との矛盾の発展をたどっている」（『マルエン選集』六、P二八三）

川島君の見解とは反対に、この訳者の解説文すら、史的唯物論の「生産」を「労働＝生産」と解釈しているのではないことは明らかとなった。解説者は、人類の発生における「労働」を「労働＝生産」と解釈したにすぎなかったのであった。

かくして川島君による宮本一派の史的唯物論の修正についての「新発見」は、音をたててくずれ去った。この「新発見」は、彼の偏見と、革命党の文筆家としての原則的な努力を無視したところに成立したものに他ならなかった。「ブンド系諸派」と宮本一派との同質性を立証しようとする派手な大芝居は失敗した。

さて、川島君は、この自からの「新発見」をさらに「発展」させ「労働＝生産」論の批判を試みている。ところでこれは、われわれが、かって、宇野、黒田に対する批判のなかでふれたこと（「共産主義」十五号P一五五）を川島君流に改悪した二番センジであるばかりか、宮本一派の議会主義への転落に対する批判を、哲学に対する批判と政治路線に対する批判をを無媒介に結合させて行なっているもの他ならず、すでに宮本一派が「労働＝生産」論など主張していないことを、我々が明らかにした段階では、川島君の一人相撲がよりはっきりと表現されているにすぎない。

だが、川島君の一人相撲は、一つの真実を示している。それは、川島君が、宮本一派の真の姿を見ぬけず、したがって、宮本派を批判することに成功していないということである。川島君は言っている。「ブンド系諸君が、宮本一味＝スターリン主義＝スターリン、としていることは、マルクス・レーニン主義の眼目がプロレタリア独裁の学説であることを、彼らがしっかり認識していないことを示すものである」（P二四八）と。笑わせてはいけない。われわれはスターリンが、プロレタリアート独裁を口では語りながら、実際には変質させる作業を、彼がレーニン死後のロシア共産党内闘争において勝利していく過程において次々と行なっていったことを批判しているのであり、スターリンがマルクス・レーニン主義の階級闘争に対する原則を修正し、ロシア共産党を、ソヴィエト官僚に売り渡し、更にマルクス・レーニン主義の理論総体を修正（『弁証法的唯物論と史的唯物論』はその典型）したことを批判しているのである。後期のスターリンが、過渡期階級闘争をはっきり否定し、ソビエト・ロシアにおける階級対立の消滅を主張したことの誤りについては、一九五六年のスターリン批判に際して、中国共産党が指摘したことでもある（ただし、中国共産党はスターリンのこのようなプロレタリア独裁の否定が、一国社会主義建設可能論から必然的に生じたものであることについて批判できず、後になって、ソ連共産党新綱領における「全人民の党」「全人民の国家」論を批判した際においてもこの限界を克服できていない）。だから、スターリン主義の一分派が、宮本一派として、口先でスターリンを批判しつつも、帝国主義国の修正主義者にふさわしく、スターリンの純粋民主主義

誤植訂正

赤報13号六面、同志竹谷の意見陳述文中のはじめから11行～12行目の「……12・18路線における『スターリン主義の復権』として……」とあるのは誤植です。おわびするとともに、以下の如く訂正します。訂正文↓「……12・18路線における『スターリン主義打倒、反スタマルクス主義止揚、革命的マルクス・レーニン主義復権』として……」

「赤報」編集局

、民族共産主義への屈服を継承し、かつ、スターリンの「史的唯物論」を継承することによって、「プロレタリアートの独裁」を投げ捨てるようになったからといって、それは不思議なことではないのである。

川島君は、宮本一派はスターリン主義ではないと主張することによって、宮本一派の本当の姿を見失い、それを批判することに成功していないのである。

今日の宮本一派が、史的唯物論をどのように把えているかが非常に鮮明になっている部分があるのでここに紹介しておこう。日本共産党機関誌「前衛」一九七三年一月号はトロッキズム批判を特集している。われわれ共産主義者同盟（RG）に対する批判の部分で宮本一派は次の如く語っている。

「岩田の理論的破綻は批判ずみであり、詳述は避けるが、それは①資本主義の基本矛盾を生産の社会性と所有の私的性格にではなく生産過程で資本が労働力を物として自由に使えない点に求める基礎的誤り②帝国主義段階ではもはや解決されない生産力と生産関係の矛盾は、万年恐慌、永久戦争を必然たらしめるという自動崩壊論、万年革命情勢論の誤り③その解決として、帝国主義戦争への人民大衆の軍事的・政治的動員を、資本主義の革命的危機に転化させることに世界革命の展望を求める主観的・冒険主義的誤り――などである。

ではブンド諸派は右のような岩田の誤りを〝克服〟したのであろうか。否である。第一に資本主義の基本的矛盾の問題では、RG派が「スターリン主義者が、生産の社会化と取得の私的性格との矛盾に注目し、生産力の発展によって社会関係が変革されると主張した裏には、〈資本―賃労働の関係を自由、平等な人格とみ、ただ搾取による経済的不平等の発生を克服し、そして資本主義的生産様式は国家によってその崩壊をまぬかれているという〉（この〈 〉の部分は全てサクショされている……筆者）スターリンの誤まった資本主義論が存在している」（「序章」九号榎原論文一一四ページ）という主張をおこなっている。

かれらは、「現代のすべての衝突がすでに萌芽としてふくまれている」ところの「社会的生産と資本主義的領有とのあいだの矛盾」（「空想からの科学へ」国民文庫版八九ページ）に注目し、「社会の物質的生産諸力は、その発展のある段階で、それらがそれまでその内容で運動してきた既存の生産諸関係と……矛盾する様になる。これらの諸関係は生産諸力の発展諸形態からその桎梏に一変する。そのときに社会革命の時期が始まる」（「経済学批判序言」「全集」⑬六ページ）という史的唯物論の基礎的命題にたいし「スターリン主義」なるレッテルを貼って、自らがマルクス・レーニン主義とまったく無縁の存在、反共反革命の存在であることを証明しているのである。」（塔坂論文P一一五〜六）

これが、宮本一派の最新のブンド批判である。ここで、塔坂が、榎原論文（序章九号）を引用し、それを批判している後半部分に注目されたい。

まず塔坂は、榎原論文を引用するにあたり、最も核心的な内容であるスターリンの資本主義批判に対する批判（〈 〉で示された部分）をすっかり削除し、あたかもこの〈 〉の部分がなかったように引用文を作りあげていることである。

そのことによって、榎原論文で意図されている、スターリンの誤まった史的唯物論の背景にある誤まった資本主義批判の暴露を一切闇の中にほうむってしまった後に塔坂は、榎原論文がマルクス・レーニンの唯物史観の公式を否定しているとの批判を行なっている。

宮本一派はソ共20回大会でのスターリン批判以後、特に最近では「スターリン主義を批判し、自らが「スターリン主義者」でないことを表明しようとしており、この点で、川島君とは異なっている。だが、ここで塔坂がとっている手法は、川島君の手法と同じである。

塔坂＝宮本一派は、スターリンの理論に対する態度を表明していない。（宮本一派のスターリン批判は、フルシチョフのスターリン批判と同じような、スターリンを個人独裁として批判する批判でしかなくスターリンを更に純粋民主主義的に悪くした立場からのスターリン批判である）そして、われわれのスターリン批判に対しては、マルクス・エンゲルス・レーニンをひきあいに出して、スターリンを擁護している。さらに、塔坂は「労働＝生産」論など展開していない。

だから、川島君の「新発見」は宮本一派の本質を見失わせ、他方宮本一派の思想を川島君自身が擁護することによって、宮本一派を助けていることを示している。川島君自身は意識していないかも知れないが、川島理論はこうした役割をはたしている。

第三節　生産の根源的要因を労働に求める川島式史的唯物論はスターリンの焼きなおしにすぎない

川島君の論文の第一章第一節、および、第二節の二に対しては、すでに検討を加えてきた。第一節では、われわれの「スターリンの史的唯物論」の批判を、マルクス・エンゲルス・レーニンの唯物史観の公式への批判だとしてねじまげ、マルクス・エンゲルス・レーニンの引用によって、反論し、その結果、「スターリンの史的唯物論」を暗に擁護しようとしたのが川島君のやり方であった。第二節の二では、宮本一派と我々の主張は同じだとする川島君のデマが展開されていたにすぎなかった。

第一章で残されているのは、第二節の一、及び三である。この部分では川島君の史的唯物論が積極的に展開されているので、われわれも、この「川島理論」をくわしく点検しなければならない。

川島理論は、彼自身の言葉によってまとめるならば、次の四点になる。

(1)「エンゲルスはこのように、あらゆる歴史的変化の究極の原因を労働に求めるのが史的唯物論であることをはっきり示している」（P二四六）

(2)**「史的唯物論の観点からは、これらの生産諸要素――労働、生産手段、その所有、労働力――の分析から、そしてそれらの発展法則から、生産力を解明し、生産関係を解明し、生産様式を解明しなければならない」**（P二四七）

(3)**「究極的には、労働（対象化された労働を含む）の分析から、その発展法則から、生産力、生産関係、生産様式を解明しなければならないのである。」**（P二四七）

(4)「それは彼ら（ブンド系諸派のこと――筆者）が、**生産、生産関係、生産力の根源的要因が労働（対象化された労働を含む）であることをしっかり把握していない**ためである。なぜなら、**第一に生産の主体的要素が労働力であり、客体的要素が生産手段（＝対象化された労働）である**ことをしっかり把握していれば『史的唯物論を〝生産〟から語る』ことは『人間労働を捨象』するものなどと決していえないからである。

第二に……**さらに生産関係は労働と生産手段およびその所有によって規定される。**

第三に……**マルクス・エンゲルス・レーニンが史的唯物論において『生産力』と語る際、それは『労働の生産力』である**ことは容易に理解できる……」（P二五〇ゴヂックは全て原文通り）

以上で全てである。われわれは、この川島式史的唯物論が革命的マルクス・レーニン主義とは全く無縁なものであることを立証することにしよう。

(一) 川島理論の第一の命題について

われわれは、もう大分長く川島君とつきあってきたので、もはや何を言われても驚きはしない。ただ、川島君の諸発見の論拠を、我々も独自に検討するのみである。

(1)「エンゲルスは、このように、あらゆる歴史的変化の究極の原因を労働に求めるのが史的唯物論であることをはっきり示している」

この川島君の第一の命題は、川島理論の根本思想であるが、彼はこの結論を、エンゲルスの『自然弁証法』の「猿が人間になるについての労働の役割」と「カール・マルクス」（川島論文ではレーニンと誤植されているが、これはエンゲルスの著作の方）に依拠して導き出している。

すでにみたように「猿が人間になるについての労働の役割」は、動物から人類が発生する時における労働の役割を考慮したものであり、それは、史的唯物論の領域の外にある問題である。更に、まだエンゲルスは猿の群と人間の社会とを区別するものとしての労働にふれているが、こういう意味での労働は、いついかなる時代の人間の社会においても共通であってそれ自体ではいつの社会をも明らかにすることが出来ない。ところが、川島君は、人間の社会を動物の群から区別するという意味での労働概念を「あらゆる歴史的変化の究極の原因」にしてしまったのである。それは、エンゲルスの「カール・マルクス」の次の部分を川島流に解釈することによってである。少し長いが根本的なところなので我々も引用しておこう。

「マルクスの名前を科学史にとどめた多くの重要な発見のうちで……第一のものは、彼が世界史の全体的理解にもたらした変革である。これまでの全歴史観は **あらゆる歴史的変化の究極の原因** は人間の変化する観念のうちにもとめる……。いま、マルクスは、これまでの全歴史は階級闘争の歴史であること、いろいろの複雑な政治闘争のすべてで問題になっているのは、社会諸階級の社会的および政治的な支配の問題、すなわちふるい階級がその支配を維持し、新興の階級が支配権を獲得する問題にほかならないことを証明した。だが、これらの階級そのものは、なんによって成立し、また存続しているのか？それぞれの時代に社会がその生活資料を生産し交換するそのときどきの物質的な卑近な諸条件によってである。……この観点からすれば――その時どきの経済的社会的状態についての十分な知識がありさえすれば……すべての歴史上の現象はもっとも簡単に説明することができ、同様にそれぞれの歴史的時代の表象や観念も、経済的諸条件と、これらの条件によってさらに制約されるその時代の社会的・政治的諸関係とからこのうえもなく簡単に説明することができる。こうして歴史は、はじめてそのほんとうの基礎の上におかれたのである。人間は支配権のために争ったり、政治や宗教や哲学などをいとなむことのできるまえに、まずもって食い、飲み、住み、衣服をきなければならない、つまり**はたらかなければならない、**という明白なしかもこれまでまったく見おとされていた事実――この明白な事実は、いまついにその歴史上の正当な権利をみとめられたのである。だが、社会主義的見解にとってはこのあたらしい歴史観はこのうえもなく重要であった」（マル・エン選集六、P二五六〜八、ゴヂックは筆者）

たしかにこの部分でエンゲルスは「あらゆる歴史的変化の究極の原因」について語り、他方「はたらかなければならない」ことについても語っている。この部分を我々はゴヂックにしておいた。ところで川島君は、このエンゲルスの引用を「ここでしっかり確認しておかねばならぬことは、あらゆる歴史観的変化の究極の原因を観念的歴史観は人間の変化する観念のうちに求めたのに対し、唯物史観は労働に求める点である」（P二四五）と解釈したのであった。

この解釈が正しいかどうかは、エンゲルスのこの部分をじっくり読めば、おのずと明らかになってくる。われわれはこの部分を次の様に解釈する。

マルクスの唯物史観は、観念的な歴史観に対して、これまでの全歴史は階級闘争の歴史であることを明らかにした。

そして階級は「それぞれの時代に社会がその生活資料を生産し交換する、そのときどきの物質的な卑近な諸条件によって」成立し、存続している以上、すべての歴史上の現象や表象及び観念は、「経済的諸条件とこれらの条件によって、さらに制約されるその時代の社会的政治的諸関係とから」説明できるのである。これがマルクスの唯物史観であると。この唯物史観によって「歴史ははじめてそのほんとうの基礎の上におかれた」のであり、この、「ほんとうの基礎」とは、観念的な歴史観が一貫して無視してきた、人間はまずもって、「はたらかなければならない」という事実である。

ところが、史的唯物論を生産から語り、それが労働を捨象することにならないことを証明したい一心の川島君は、「これまでの全歴史が階級闘争の歴史であること」を忘れ去り、唯物史観が階級闘争の歴史の分析であるというイロハを忘れ去り、その結果「歴史的変化の究極の原因を労働に求め」てしまったのであった。

だが、先にもふれたように、エンゲルスが、「猿が人間になるについての労働の役割」でふれている労働や、また、この部分ででてくる「はたらかねばならないこと」は、決して「あらゆる歴史的変化の究極の原因」などではなく逆に、いつの時代にも共通な、エンゲルスの言葉を借りるならば歴史の基礎なのである。ここでの、「はたらく」ということは、人間は生きてゆかねばならないということと変りはないのであって、川島君は、あらゆる歴史的変化の究極の原因を結局人間がはたらかねばならないことに求めてしまったのである。

たしかに、人間ははたらき、生きてゆかねば、社会も歴史も存在しない。だから、このことは、歴史の基礎ではある。しかしそれは歴史的変化の究極の原因として抽象化されてはならない。なぜなら、はたらくこと一般を分析しても、歴史を明らかにすることは出来ないからである。「それぞれの時代に社会がその生活資料を生産し交換する、そのときどきの物質的な卑近な諸条件」はまさに、それ自体として具体的に分析されなくてはならないのであって、川島君のように、生産様式あるいは生産関係、生産力の「根源的要因」に労働をもってくるような形而上学によっては、何も明らかにすることができないのである。

川島君は一方では、マルクス・エンゲルス・レーニンを引用することによってスターリンを擁護しつつも、他方では、我々＝宮本一派＝「労働＝生産」論者と批判しつつ、自分自身が「労働を歴史的変化の究極の原因としてみるのが史的唯物論」という形而上学におちいってしまった。このことは、ある意味で黒田哲学その他の主体性唯物論への屈服である。スターリンを擁護しながら、主体性唯物論に屈服するというこの逆説は、しかし何ら不思議ではない。スターリン主義哲学にしろ、主体性唯物論にしろ、革命的マルクス・レーニン主義における哲学一般の批判を何ら理解していないという点では同根なのだからである。

(二) 川島理論の第二の命題について

(2)「史的唯物論の観点からは、これらの生産諸要素――労働、生産手段、その所有、労働力――の分析から、そしてそれらの発展法則から、生産力を解明し、生産関係を解明し、生産様式を解明しなければならない」

この川島君の第二の命題は何に依拠しているか。それは、マルクスの『ゴータ綱領批判』である。ところでこの引用部分を検証するために、われわれは川島君が引用しなかった部分をも引用しその部分は〈 〉で示しておく。

・「〈以上に述べたことをべつにしても、総じていわゆる分配のことで大さわぎをして、それに主要な力点をおいたのは誤りであった。〉

いつの時代にも消費資料の分配は、生産諸条件そのものの分配の結果にすぎない。しかし生産諸条件の分配は、生産様式そのものの一特徴である。たとえば、資本主義的生産様式は、物的生産諸条件が資本所有と土地所有という形ではたらかない者のあいだに分配されており、これにたいして大衆は人的生産条件すなわち労働力の所有者にすぎない、ということを土台にしている。生産の諸要素がこのように分配されているときには、今日のような消費資料の分配がおのずから生じる。〈物的生産諸条件が労働者自身の協同的所有であるときには、おなじように、今日とはちがった消費資料の分配が生じる。分配を生産様式から独立したものとして考察しとりあつかい、したがって社会主義をおもに分配を中心とするもののように説明するやり方は、俗流社会主義がブルジョア経済学から（そして民主主義派の一部がさらに俗流社会主義から）うけついだものである。〉」（『マルエン選集』六・P二〇）

この部分から川島君は次のような結論を引き出す。「史的唯物論の観点からは、これらの生産諸要素―労働、生産手段、その所有、労働力――の分析からそしてそれらの発展法則から、生産力を解明し、生産関係を解明し生産様式を解明しなければならない」と。

はたして、マルクスの『ゴータ綱領批判』に対する川島君のこのような解釈は正当なものとみなしうるだろうか？いや、否である。川島君のこの結論は、この引用部分の前後関係を無視し、マルクスの論旨を無視したことによって導きだされた的はずれな解釈であるにすぎない。

そもそもマルクスは、この部分で、史的唯物論の観点を説明しているわけではない。ここでは、ゴータ綱領に盛り込まれた、ラッサールの誤った社会主義社会論、（労働収益の公正な分配論）を批判しているのであり、だから、ここでは文字通り「消費資料の分配は生産諸条件そのものの分配の結果にすぎない」ことが強調されているのである。

だが、川島君は、このマルクスのラッサール批判の部分を普遍化し、「生産の諸要素がこのように分配されているときには、今日のような消費資料の分配がおのずから生じる」という部分に特別な意味あいを持たせ、この部分に依拠して川島理論の(2)、「生産諸要素……の分析から……生産様式を解明」するという命題を導いたのであった。

だが、こうした解釈が誤りであることは、この川島君自からが引用した部分をよく読めば明らかになる。マルクスは、消費資料の分配は、生産諸条件そのものの分配の結果にすぎないことを主張した上で、川島君のように、だから、生産諸要素の分析から、生産様式を解明すべきであるといったことは言わずに、むしろ逆に、次のように主張する。「しかし生産諸条件の分配は、生産様式そのものの一特徴である」と。

結局マルクスは、生産諸条件の分配を、生産様式そのものの一特徴であると考えており、したがって、生産様式の分析によって、その一特徴たる生産諸条件の分配を明らかにすれば、おのずと消費資料の分配については明らかにされる、ということを主張しているのである。

ところが、川島君は、消費資料の分配を明らかにすべき生産諸条件の分配から、生産様式を解明すると解釈している。明らかに川島君は、経済学による分析の成果とこれから分析すべき出発点とを混同し、分析の成果である事柄を分析のための出発点だと考えているのである。

(三) 川島理論の第三及び第四の命題について

(3)「究極的には、労働（対象化された労働を含む）の分析から、その発展法則から、生産力、生産関係、生産様式を解明しなければならないのである」

川島君のこの第三の命題は、第二の命題を第一の命題を観点から言いかえたものにすぎない。かくて誤りは二乗されて表われるが、それは、この第三の命題の適用である第四の命題の批判のなかで明らかにしてゆこう。

川島君は、第一の命題と第二の命題において、マルクス・エンゲルスを勝手に解釈して、新しい川

島式史的唯物論を作りあげ、かくして、「史的唯物論を生産から語ることは人間労働を検象するものなどとは決していえない」ことを論証すべく、いよいよその内容を「発展」させる。

(4)「それは彼ら（ブンド系諸派のこと――筆者）が、生産、生産関係、生産力の根源的要因が労働（対象化された労働を含む）であることをしっかり把握していないためである」

このように、川島君は、「歴史的変化の究極の原因を労働に求める」という第一の命題からさらに「生産、生産関係、生産力の根源的要因が労働（対象化された労働を含む）である」という第四の命題へと飛躍した。

この川島君の深刻な哲学的命題が、全くの形而上学であり、ブルジョア思想であることを示すためには、川島君が、第四の命題においてあげている三つの例証を検討してゆけばよいのである。

「第一に、生産の主体的要素が労働力であり、客体的要素が生産手段（＝対象化された労働）である」

これが、川島君の、生産の根源的要因が労働（対象化された労働を含む）である事の説明である。ここで、川島君が、「生産手段（＝対象化された労働）」としていることに注意されたい。彼は生産の根源的要因が、労働（対象化された労働を含む）であることを示したいがために、自然を無視してしまっている。

あまりにも有名で、かつ川島君も暗記しているはずであるマルクスの『ゴータ綱領批判』は次のようにいましめている。

「この節の最初の部分『労働はあらゆる富とあらゆる文化の源泉である』。

労働はあらゆる富の源泉ではない。自然もまた、労働とおなじ程度に使用価値の源泉であり、また労働そのものが、一つの自然力すなわち人間労働力の発現にすぎない。前記の文句はあらゆる小児用入門書のなかにあるが、労働がそれに応じた対象と手段とをもっておこなわれるということが言外にふくまれているものとすれば、これはただしい。しかし、ある条件のもとでのみそのことが意味をもつものとなるのに、その当の条件についてだまっているというようなブルジョア的な言葉づかいを、社会主義的な綱領がゆるしてはならないのである」（マルエン選集六、P八）

川島君は反論するか知れない。自分は生産の主体的要素と客体的要素として「労働がそれに応じた対象と手段をもっておこなわれること」を示しているではないか。そしてまた、自然、ないし使用価値は「対象化された労働」という言葉で現わしているではないか、と。

だが、われわれの批判点は次の事柄にある。第一に、川島君は、動物の群と人間の社会とを区別するという意味での「労働」と、古典経済学の出発点であった「労働」とを混同してしまっている。第二に、経済学においては、労働生産物としての商品は、全て、いくらかの分量の、「対象化された労働」を含んでおり、なにがしかの価値を持っているということと、使用価値としての商品は、なにがしかの具体的有用的労働の産物であるということを区別することが出来ていない。川島君は、両者ともに「対象化された労働」という言葉で表現しているのである。ここから必然的に、「生産手段（＝対象化された労働）」という彼の誤りが生じる。だが、この見解からすれば、海洋とか土地は生産手段ではなくなることになる。さらに、労働生産物からなる生産手段も、価値としては対象化された労働であるが、しかしその使用価値としては、対象化された労働と等しいものではありえない。川島君は、ここで資本の生産過程ではなくて、生産一般について語っているのだから、ここでの生産手段は使用価値として考察されていることは言うまでもない。ところが、マルクスは更に、川島君に対して次のように反論している。

「使用価値たる上衣、亜麻布など、簡単にいえば、商品体は、自然資料および労働という二つの要素の結合したものである。上衣、亜麻布などのうちに含まれている一切のさまざまな有用的労働の総和を取去るならば、つねに人間の協力なしに天然に現存する物質的基体がのこる。人間は、その生産においては、自然そのものと同じように振るまいうるのみ、すなわち、資料の形態を変化させうるのみである。それどころか、この形態変化労働そのものにおいて、人間はたえず自然力によって支持される。だから労働はそれによって生産される使用価値・資料的富の唯一の源泉ではない。ウイリアム・ペティがいうように、労働は資料的富の父であり、土地はその母である。」（『資本論』角川文庫P六九）

川島君は、生産の根源的要因が労働であることを示すために、客体的要素である生産手段を対象化された労働であると考えることによって、使用価値の唯一の源泉が労働であると主張したのである。

川島君は第二章でわれわれが「具体的有用労働をしっかり把握できていない」ことを強調しているが、しかしここで、彼は、商品の使用価値と価値との区別すらつけることが出来ていないのである。たしかに商品は、価値としては、自然的資料をみじんも含まず、対象化された労働として把握しうるが、使用価値としての商品を対象化された労働として考えるのはブルジョア思想に他ならないのである。

ところで、川島君のこうした誤りはどこから来たのであろうか。それはエンゲルスの論文に対する解釈の誤り、すなわち、第一の命題から来ている。逆に、第一の命題の破産は、第四の命題の破産として、実証的に示されたわけである。ところで、エンゲルスの名誉のためにも、川島君がエンゲルスをふみにじり、その結果第一の命題を導いたことを示しておこう。

「労働はあらゆる富の源泉である。経済学者はこう言っている。労働はたしかにそういうものであるが――ただし自然とともにそうなのである。つまり自然が労働に素材を供給し、それを労働が富にかえるのである。しかし労働はなお無限にそれ以上のものである。労働はいっさいの人間生活の第一の基本条件であって、しかもある意味では、労働が人間をつくりだした、といわなければならない程度にそうである」（エンゲルス「猿が人間になるについての労働の役割」）

この部分は川島君も第一の命題を導く際に引用している。というより、第一の命題は、この部分からヒントを得ているといってもよい。川島君はこの引用につづいて「そして労働がすべての歴史上の現象を規定していること、それぞれの歴史的時代の表象や観念も規定していること、歴史的変化の究極の原因は労働（対象化された労働を含む）にあること、これが史的唯物論の観点であること、これもいうまでもない」（P二四五）とつけ加えている。

だが既にみてきたように「労働が歴史上の現象を規定している」仕方は、労働がなければ歴史もないという意味での規定の仕方であり、エンゲルスの言う「労働はいっさいの人間生活の第一の基本条件」であるということは、こういう意味である。だが、川島君は、このエンゲルスの言葉を、労働が「歴史的時代の表象も観念も規定している」という風に読むことによって、労働が歴史の主体となり、いわば、労働の自己運動を歴史と考え、この結果、エンゲルスが正当にも「ただし自然とともにそうなのである」とつけ加えている部分を無視し、労働に超自然的能力があるかの如く考えてしまったのであった。

「第二に、……さらに生産関係は労働と生産手段およびその所有によって規定される…

第三に……マルクス・エンゲルス・レーニンが史的唯物論において『生産力』と語る時、それは、『労働の生産力』であることは容易に理解できる。……」

さて、いよいよ川島式史唯物論の最後の部分に到達した。この辺になると川島君の論証も全く乱雑なものになってしまっている。

たとえば、川島君の第四の命題の第二の部分についての例証には「資本関係は、労働者と労働実現条件の所有との分離を前提とする」といった、資本制的生産様式の実存条件をひきあいに出しているにすぎない。川島君は、ここでは生産関係が、労働と生産手段、およびその所有によって規定されているから、それゆえに、生産関係の根源的要因が労働であると言いたいのであるが、それは、人間社会の根源的要因は人間にあるといったタワ言と変らない。

さらに、第四の命題の第三の部分で「生産力」が「労働の生産力」であることを論証するために、次の部分を引用しているのも全く混乱を示すもの以外の何ものでもない。

「生産力なるものは、もちろんつねに、有用的・具体的労働の生産力であって、事実上では、ただ与えられた時間内における合目的な生産的活動の作用度だけを規定する」（『資本論』）

この部分は、労働の生産力の変化が、価値の大いさに対してもたらす影響を考察している部分であり、生産力が、有用的・具体的労働の生産力だから、同じ時間に支出される労働の価値の大いさを変えはしない（ただ、相異なる使用価値を生産するから、商品の価値は変動する）ことが説明されている。だが、この部分から、川島君は、生産力とは、労働の生産力だなどと一般化して主張しているのである。

このような混乱にみちた、川島君の「生産関係、生産力の根源的要因が労働にある」という史的唯物論に対しては、われわれはすでに三年前に、スターリンの、「生産」概念を批判する時に依拠したマルクス『経済学批判序説』をここでも引用しなければならない。

「こういうように、生産というばあいには、いつでもある一定の社会的な発展段階での生産――社会的な個人の生産――をさすのである。だから、いやしくも生産について語るためには、われわれは歴史的発展過程をそのさまざまな局面で追求しなければならないか、さもなければ、われわれがとりあつかうのは、ある一定の歴史的時代、したがってたとえば、事実上われわれの本来のテーマである近代ブルジョア的な生産であるということをまえもって明らかにしておくが、そのどちらかしかないように思われるかも知れない。だがしかし、すべての時代の生産は、一定の特徴を共通にもっており、共通の規定をもっている。生産一般とはひとつの抽象であるが、しかしそれは、共通のものを現実に浮きださせ、固定させ、それによってわれわれのくりかえす労をはぶくかぎりでは、ひとつの合理的な抽象である。けれどもこの一般的なもの、すなわち比較によってえらびだされた共通なものは、それ自身、多様にくみたてられたものであり、さまざまな規定にわかれるものである。そのうちのいくつかのものはすべての時代に属し、ほかのものはいくつかの時代に共通である。ある規定はもっとも新しい時代ともっとも古い時代とに共通であろう。そういう規定がなくては、どんな生産も考えられないであろう。しかし、もっとも発達した言語がもっとも発達しない言語と法則と規定とを共通にもつとしても、その発達をなすものこそ、まさにその一般的なものおよび共通なものからの区別であって、「生産一般」にあてはまる規定が区別されなければならないものは、まさに――主体である人間と客体である自然とはどこまでも同じだということからすでに生じる――同一性に気をとられて、本質的な差別が忘れられないためである。この差別を忘れるところに、たとえば現存の社会的諸関係の永遠性と調和とを証明する近ごろの経済学者達のあらゆる知慧があるのである。

例えば、生産用具がたとえ手だけにすぎないとしても、この用具がなければどんな生産もできない。過去の蓄積された労働が、たとえくりかえしなされた練習により野蛮人の手に蓄積され集中された熟練にすぎないとしてもこの種の労働がなければどんな生産も出来ない。資本は、なによりもまず生産用具でもあり、過去の客体化された労働でもある。だから資本は、ひとつの一般的、永久的な自然関係である。だがそれは、もしもわたくしが「生産用具」や「蓄積された労働」をはじめて資本とする特殊なものをとり去ってしまったばあいに、そうだということである。だから生産諸関係の全歴史は、たとえばケアリにあっては、もろもろの政府によって悪意をもっておこなわれた改悪としてあらわれるのである。もしも生産一般がないとすれば、一般的生産もない。生産は、つねにひとつの特定の生産部門――たとえば農業、牧畜、製造業等々、またはその全体である。だが経済学は技術学ではない。ある与えられた社会的段階における生産の一般的規定が特定の生産形態にたいしてもつ関係は、ほかの箇所で展開されるはずである」（岩波文庫『経済学批判』P二八九―二九一）

この部分に依拠して、われわれは、スターリンが、史的唯物論を生産一般から始めていることを批判し、そしてまた、宇野弘蔵の、経済原則の提起を批判してきた。

川島君が、この第一章で展開している「生産」や「労働」という言葉は、「一定の社会的な発展段階での生産」について語っているのではない。彼は動物の群と人間の社会とを区別するという意味での労働と、資本制的生産様式のもとで賃労働者が行っている、労働＝賃労働とを混同させて平然としている。

だから、彼は、スターリン同様「生産一般」について考察している。彼とスターリンとの相異点は、彼が「生産一般」にその「根源的要因」である「労働一般」をつけ加えている点である。もちろん、マルクスも言っているように、「生産一般」を考察することそれ自体が誤りなのではない。それは「共通のものを現実に浮きださせ」る限りにおいては、合理的な抽象である。しかし「生産一般」を考察するにあたって注意すべき点は、まさに、個々の具体的な発展段階において、その共通なもの自体の区別が問題にされねばならないということである。そして、この区別こそが、特定の発展段階にある生産の説明である。

にもかかわらず、いつの時代の生産にも共通な事柄をひき出し、それを公式にまとめあげているのが、川島君の史的唯物論に他ならない。川島君は、スターリン「生産一般」の史的唯物論に「労働一般」をつけ加えることによって独自の理論をつくりあげたのであった。

「すべての生産段階には、共通の諸規定があり、それらは、思考によって一般的なものとして固定される。しかもいわゆるすべての生産的諸条件とは、こうした抽象的な要因にほかならないのであって、それによっては現実の歴史的な生産段階のどれひとつをも理解することはできない」（『経済学批判』P二九五）

われわれは、川島君が、どのような理論体系を作りあげようと、知ったことではないが、しかし、この理論体系こそが「生産様式を解明し」うるなどという川島君の主張には以上のようにマルクスと共に反論しておかねばならない。

「生産関係は、労働と生産手段およびその所有によって規定されている」とか、生産力とは「労働の生産力である」とかいった川島君の主張は、言語とは声帯の振動である、といったことを語って何か明らかにしたつもりになっている言語学者の主張に等しい。

川島君の主張が、一見科学的なよそおいをしているように見えるのは、彼が『資本論』をはじめとする、マルクス・エンゲルス・レーニンの諸著作の引用によって、自からの思想を正当化しようとしているからにすぎない。われわれは次に、川島君のこの史的唯物論が『資本論』の根本思想とあいいれないものであり、彼の資本主義批判が、ブルジョア的な資本主義批判でしかないことを明らかにしてゆく。

（つづく）

※※※※※※※※※※※※※※※※

共産主義16号　発売中・定価550円

（内容）

第一部　主　張

当面する革命戦争の更なる発展のために

第二部　共産主義者同盟（RG）結成にむけての党内一党派闘争

第三部　連合赤軍との党派闘争

分派闘争と理論問題

共産主義14号

共産主義15号

発売中

残部僅少

スターリン主義に屈服した革共同革マル派の戦術の批判（中）

第二章　革マル派「反帝反スタ戦略」の批判

革マル派は以下のごとくいう。

「我々の世界革命戦略（「反帝反スタ」――筆者注）およびその理論的解明（Ⅱa）は、直接には第四インターナショナルの戦略論（Ⅱd）を、変質したソ連邦とその国家群、これを物質的基礎としたスターリニスト運動、この両者を根底から規定している一国社会主義論およびこれからみちびきだされた反マルクス的なすべての革命論（Ⅱc）の理論的粉砕を媒介としながら、批判的にうけつぎ改作したものである。しかし同時にさらにレーニンやトロッキーの革命理論（Ⅱb）を世界革命の特殊的段階論（Ⅱa）として再構成しまたマルクス・エンゲルスの世界革命論（Ⅰa）をも普遍的本質論（Ⅰa）としてみがきあげ、かつこれらをすべて適用する、という理論活動に、それはささえられ、かつ今後とも理論的に深化されねばならない。」（「日本の反スターリン主義運動2」P二五三）

我々はこの後者、革マル派のいう「世界革命論（革命現実論）」については、その枠組が、第一にスターリン・トロッキー以後の戦略綱領主義の枠内のものであり、第二にその革命論における三段階理論が、理論を実践の指針として扱うのではなく、理論の構造を解釈し、現実にあてはめるものであり、マルクス・レーニン主義の再構成の名のもとに、マルクス、レーニン、トロッキーの理論を切り刻み修正するものであり、資本論及び帝国主義論を修正するものにほかならず、総じて「反帝反スタ戦略」を美化するための枠組であることを明らかにした。そして彼らのこの理論は現実的にはプロレタリア国際主義からの背教としての民族共産主義であり、プロレタリアート独裁を階級闘争の目的とし、過渡期の階級闘争を否定するマルクス・レーニン主義の修正、歪曲であることを明らかにした。

従って、我々は次に先の引用部分の前半、革マル派の「反帝・反スタ戦略」について批判しなければならないのだが、その前に、我々はいくつかの前提的な作業を行なっておく必要がある。

革共同全国委員会の「反帝反スタ戦略」は、一九五七年の日本トロッキスト同盟、そして同年の革共同への名称変更、五八年の第一次分裂、五九年の第二次分裂時の党内―党派闘争を通して生み出された。それについて彼らはこう述べている。

「スターリニズムに対するわれわれの闘争は、たんなるトロッキズムの移植によってではなく、日本プロレタリア階級闘争の現実的課題との対決を基礎としたトロッキズムの批判的継承をバネとして推進されている。われわれの反スターリニズム運動の推進は、それゆえ同時に、われわれの革命理論の創造過程でもある。

たとえばまず第一に、現在のスターリニスト党を基本的に規定しているフルシチョフ路線はスターリニズムの社民的修正主義にすぎず、このようなものとして正統派スターリニズムとしての毛沢東主義に対立しているのであるが、この両者の基底にあるプロレタリアート独裁論の歪曲（スターリン＝ブハーリン流の二段階革命論やその誤謬の展開としての人民戦線戦術など）を暴露し粉砕する場合にも、われわれは、それらに「永続革命」としての世界革命の理論を直接対置することにとどまるのではなく、さらに進んでレーニンやトロッキーの革命独裁論の批判的摂取を媒介として前進しようとしたのである。（……）したがって第二に、トロッキーの『過渡的綱領』にしめされている第四インターナショナルの基本路線にたいしても、われわれは、左翼反対派の政治的敗北という悲痛な過去を組織的に反省することを基礎としつつ左翼的批判を行い、現段階における世界革命戦略として〈反帝・反スターリニズム〉のスローガンを提起したのである。さらに第三に、トロッキー死後の第四インターナショナルの分裂と衰退が現代ソ連邦の性格規定の問題、つまるところスターリニズムの評価のしかたにおける分裂にあることを明白に認識しつつ、われわれは、現代トロッキストの堕落をものりこえて前進せざるを得ないのである。」（「日本の反スタ運動1」P八九）

以上が革マル派の革共同第一次第二次分裂時において「戦略」問題において党内党派闘争が何をめぐって闘われたのかという点についての基本的な見解である。この他に第一次分裂時にその直接的契機となった「組織戦術（加入戦術）」の問題、第二次分裂時における戦術問題があるが、ここではとりあげない。

革マル派が第一の点として言っている問題は、日本トロッキスト同盟の「反資本主義政府」、さらに一九五八年の第四インター・フランス支部の反ドゴール闘争における「社共政府樹立」をめぐる論争としてあり、それを契機としたスターリン、レーニン、トロッキー、そしてマルクスにおける権力論、独裁論の評価についてであった。第二の問題は革共同第二次分裂時における、第四インターの「反帝・労働者国家無条件擁護」に対する批判としての「反帝反スタ戦略」の問題であり、第三点は、フルシチョフのスターリン批判、ハンガリア革命、一九五七年のソ連核実験等をめぐる論争としてスターリン主義―ソ連論の評価の問題であった。

これらは革マル派のいういわゆる「戦略」問題であり、彼らの「反帝反スタ戦略」の創出のための党内―党派闘争であった。従って我々は面倒でも、第一点の独裁論の問題、次いでスターリニズムとそれに対する第四インターナショナルの評価の問題、第三に革マル派の「反帝反スタ」の枠組そのものについて批判していくという、若干のまわり道を通って進むことによって、革マル派の社会帝国主義としての性格を、より根本的に暴露するというやり方をとろうと思うのである。

① マルクス、レーニンの戦術に対する態度とトロツキー、スターリンの戦術に対する態度

まず日本トロッキスト同盟の「反資本主義政府樹立」に対して当時の革マル派が何を主張していたかを聴こう。

「レーニンとトロッキーの独裁論のうけとめ方におけるこのような理論上の分裂は、それが革命戦略（論）に直接かかわる理論的問題であるがゆえに、じつに決定的なものであった。たしかに、わが自称トロッキスト諸君は、トロッキー自身の折衷主義的な煮えきらない態度までも、ドグマチックに受け入れているほどなのである。その意味で、わがトロッキストたちはトロッキー的であるとすらいわねばならない。だが、われわれは、こういう態度を断固として拒否せざるを得ない。レーニン理論にコビを呈するようなトロッキー自身の折衷主義的で調停者的な態度を、むしろトロッキーの理論的優越性のゆえに、惜しむばかりでなく、進んでそれを清算すべきことを、われわれは公然と明白に主張せざるを得ない。それと同時にトロッキーの折衷主義的態度（理論闘争におけるこのような態度とレーニン死後スターリンなどの輩に指導権をうばいとられたトロッキーおよび左翼反対派のあのみじめな敗退とは、決して無関係ではないであろう。）のゆえに、不可避にかつ無意識的に彼自身の理論のなかにもりこまれたレーニン的な諸要素―たとえば「労農政府」をスローガンとしてなら是認するというやり方、「民主革命」から「社会革命」へのいわゆる「直接的成長」論など――を勇敢に排除すべきことを、われわれは主張する。なぜなら、それらは、マルクス主義国家＝革命理論の基本原則から導きだしえないものだからである。」（「革命的マルクス主義とは何か」P五七～五八）

革マル派はこのようにトロッキーのレーニンに対する理論的な折衷主義的態度、具体的には、「結果と展望」に於る「民主々義革命から社会主義革命への直接成長論」、一九一七年以後の「労農政府」の承認等を批判し、トロッキスト（太田竜派）がかかるトロッキーのレーニンに対する態度をそのまま受け入れてしまっていると批判している。このように主張する革マル派の問題意識は以下のごときものである。

「今日のスターリニスト党の二段階戦略が、このようなスターリン（さらには毛沢東）によるレーニン二段階戦略の理論的一般化に歴史的出発点をおいている以上、スターリニストの二段階戦略のエセ・マルクス主義性をあばき出すためには、レーニンの二段階戦略の問題性にさかのぼらねばならない。」（「ロシア革命と反スターリニズム」P二八）

「レーニンの間違った『市場理論』、間違った『農業理論』が、かの二段階革命論と結合されつつ民族・植民地問題に適用される場合には、後年スターリンや毛沢東によって完全に民族主義的に理論化されてもやむをえないような『民族の自決権・主権』にかんする理論さえもがうみだされたのであった。」（「日本の反スタ運動2」P二四九）

このように革マル派の問題意識はスターリン主義の源流としてレーニンの理論を見る所にある。さらに彼らはレーニンの誤謬の根拠として次のように言う。

「これは（レーニンの労農独裁―筆者注）、直接にはかのマルクスの「権力移動」論がロシア革命戦略の定式化のためにあてはめられたことにもとずくものである。」（同P二四八）

これはあとで検討するように、「権力移動論」そのものが誤っていたと主張されるのであり、結局誤ったレーニンの「労農独裁」という見地の根拠はマルクスにあるのだとして、マルクス「権力移動論」→レーニン「労農独裁論」→スターリン「二段階革命論」という系譜を作りあげている。

そしてレーニンの誤りの根拠としてもう一つ、レーニンは「帝国主義論」以前においては帝国主義段階への突入の認識がなく、かつ誤った市場理論に基ずく農業理論を展開したことにあると述べられそれに比してトロッキーは違っていたと述べる。

「トロッキーはその『一九〇五年革命の結果と展望』において、国際革命の一環としてたたかいとられるべきロシア革命はブルジョア民主主義革命から社会主義革命へと『直接に成長』するであろうという展望をうちだし、これを永続革命として定式化した。その根底には、レーニンと異なり、帝国主義段階への突入という時代認識があった。……こうして彼はマルクスの『権力移動』論の適用限界をつきだしながら、レーニン型の「不確定戦略」を批判することができた。」（同P二五〇）

このように、レーニンが帝国主義段階への突入の認識がなかったのに対し、トロッキーは、その突入の認識にささえられて、限界を持ちつつも、マルクスの誤まれる「権力移動論」を継承することもなく、レーニンの戦略をも批判しえたというのである。

革マル派のこのような「二段階戦略」批判からするマルクス・レーニン主義に対する批判は、ソ連共産党を中心とする社会帝国主義の潮流と中国共産党、朝鮮労働党ベトナム労働党その他の民族解放戦争を闘っている諸党とを全く区別せずに、押しなべてスターリン主義として打倒対象とする、反帝反スタ戦略の全き反動性につながっている。彼等は日本共産党宮本派が日本帝国主義下で民族解放民主主義革命を唱えることによって民主連合政府―革新統一戦線論としての自らの社会帝国主義への転化を隠蔽していることと、被抑圧民族の共産党が、スターリン主義の思想的影響をいまだ充分に克服していないとはいえ、民族解放民主主義革命の路線にそって、民族解放戦争を闘っていることとを同一視することによって、実際上は排外主義に転落し、日本共産党の補完物として行動しているのである。

我々はスターリンに対するトロッキーの優位性を主張することによって、スターリン主義の源流としてレーニン主義を見る反スタ諸派（特に革マル、革労協）の俗説また他方トロッキーに対するスターリンの優位性を主張することによって、レーニン主義の継承としてスターリン主義を位置ずけるスターリン主義の俗説を徹底的に批判しなくてはならない。革命的マルクス・レーニン主義の戦術に対する態度は一貫しているのでありトロッキー及びスターリンは、それぞれ異ったやり方で、革命的マルクス・レーニン主義を歪曲したのである。革マル派はトロッキーを擁護するばかりでなく、トロッキーのあいまい性の克服と称してトロッキーの誤りを最悪のかたちで拡大し、マルクス・レーニン主義を真正面から攻撃している。この革マル派の反動性を、我々は具体的に暴露していこう。

(a) マルクスの「呼びかけ」

㋑ 革マル派のマルクス批判

革マル派がマルクス「権力移動論」と称しているのは、マルクスの「共産主義者同盟への中央委員会の呼びかけ」（以降「呼びかけ」と略す）における「一般的にはドイツにおける権力が、ブルジョア権力→小ブルジョア権力→プロレタリア権力というように連続的に移行する」（「共産主義者十九＝二十号」P二一〇筆者）という見解をさしているのだそうだ。

我々はまず革マル派の見解を一つ一つ検討し、マルクスの「呼びかけ」に即して反論していく。

「マルクスは」「このような実体論的かつ機能論的な革命論を提起してしまったわけであるが、そのようになった根拠の第一は、樹立すべき権力の性格をば、（現存する国家権力の分析に踏まえつつ）プロレタリアート世界革命論の適用との統一において解明することなく、現存する階級勢力間の階級的力学関係もしくは、それらの権力がとるであろう政策から直接導きだそうとしたことである。」（同）

革マル派がここでいう「世界革命論の適用」というのは、資本―賃労働関係が国際的に形成され始めたのだから、樹立する権力の本質的規定はプロレタリアート独裁でなければならないという見解である。そして当時のドイツの国家権力の分析として彼らが述べているのは先の「権力移動論」の引用の所で見られるごとく「ブルジョア権力」であったというものである。

後者、まず当時のドイツの国家権力の性格について述べておく。マルクスは次の様に言っている。

「一八四八年の三月運動の後ただちに国家権力を掌握し、この権力を利用して、労働者、すなわち闘争中の自分らの盟友を、ただちに以前の被抑圧者の地位におしもどしたのは、ブルジョアであったのだ。ブルジョアジーは三月革命で一掃された封建的党派とむすびつくことなしには、結局はこの封建的・絶対主義的党派にふたたび支配権をゆずりわたしさえすることなしには、このことを実行できなかったのである」（「よびかけ」、傍点筆者）

「彼ら（ブルジョアジー――筆者）は、もし革命運動がいまごろはもういわゆる平和的発展をたどることが可能であるなら、政府の財政難を通じて、ついに彼らの手に支配権をにぎらせ、彼らのいっさいの利益を保障したであろうような諸条件を確保したであろう。……しかし発展はこうした平和な道ゆきをとらないであろう。逆にこの発展を促進する革命は……目前にせまっている。そして、ドイツの自由主義的ブルジョアたちが一八四八年に人民にたいして演じた役割、このきわめて裏切的な役割は、さしせまった革命においては、今日、野党として一八四七年以前の自由主義ブルジョアたちと同じ位置をしめている民主的小ブルジョアたちによってひきつがれるであろう。」（同。傍点筆者）

以上のようにマルクスは「よびかけ」当時のドイツの国家権力を掌握しているのは、封建的・絶対主義的党派だと述べている。そして、ドイツの労働者階級は「この発展を促進する革命」＝民主主義革命に当面していることを述べている。マルクスは決して当時のドイツの国家権力を掌握していたのがブルジョアジーだなどとは述べていない。革マル派は最初にまずマルクスの主張を歪曲し、それからその主張を批判することによってマルクス批判だと称するデマゴーグとしての常とう手段を行っている。マルクスは、当時のドイツの国家権力がブルジョアジーのプロレタリアートに対する裏切りによって、封建的・絶対主義的党派に掌握されていることを指摘し、ドイツにおいてはいまだ民主主義革命が終っていないことを、具体的な階級の相互関係の分析にもとずいて主張しているのである。マルクスは決して「階級的力学」や「それらの権力のとる政策」から直接樹立する権力の性格を導き出しているのではない。革マル派は結局一定の歴史的条件の下では労働者階級は民主主義革命に参加して闘わなければならないことがあるということについて理解できないのであるが、革マル派のこの全く無媒介なプロレタリア権力樹立論こそ、当時のドイツの具体的な階級の相互関係を何ら分析しないものなのである。革マル派は民主主義革命においてもプロレタリアートの革命党が独立に組織されることによって、プロレタリアートの独自性が確保されなくてはならないということを、国際的に資本主義が発展しているのだからプロレタリア権力を樹立しなければならないという経済主義的空論にすりかえている。このような空論は、実際は民主主義革命としての

発展段階にあった当時のドイツ革命を共産主義革命として美化するものであり、もし、当時実際に主張されていたとすれば、小ブルジョアジーに対するプロレタリアートの党派性をあいまいにし、小ブルジョアジーの行動を美化する役割をプロレタリアートに果たさせるものとなったに違いない。

更に革マル派は次のように言っている。

「第二の問題は、樹立する権力の性格が、権力の機能という側面から直接導かれるということは、他面からいえばプロレタリア権力の実体論的解明が、なお十分になされていなかった……ドイツのような「後進国」においてはプロレタリアートはみずからイニシャチーブを発揮し、ヘゲモニーを貫徹させつつ他の諸階層をまきこんで革命闘争を推進しなければならないし、権力の政治的組織構成においてもそれは反映されざるをえない。……ソビエット労農同盟に関する問題が、なお組織論的には明確になっていなかった」（同P二一〇〜一一）

要約すれば、先の「権力がとるであろう政策」から樹立する権力の性格を導きだすという考えは、権力の機能論的な把握であったのであり、それはマルクスが「権力の実体論的解明」、すなわち「ソビエット労農同盟」に関する問題が解明されていなかった事にも負っているとされているのである。

我々の反論は次の通り。

①マルクスがこの「呼びかけ」を書いたのは一八五〇年であってロシアの一九〇五年及び一九一七年における労農ソビエトの結成のはるか以前であったばかりか一八七一年のパリ・コンミューンさえ存在していなかった時代であること。一八五〇年当時のドイツは先にも述べた如く、民主主義革命に当面していたのであって、マルクスはこの革命、及び小ブルジョア民主主義者に対するプロレタリアートのとるべき態度を述べていること。（マルクスは一八四八年の「新ライン新聞」では人民の専制について語っていること、すなわち革命的民主主義的独裁の主張であり、レーニンはこの独裁論をロシアにおいて継承した。）

②にもかかわらず、革マル派は「ソビエット労農同盟」を持ち出して、マルクスを批判している。単に無媒介にプロレタリア権力樹立論を唱えるばかりでなく、歴史的に当時まだ経験として存在していなかったことをもち出して、一八五〇年代のマルクスを批判するという、このようなやり方を観念論というのである。革マル派は「実体論的解明」などと、何か当時のマルクスがもっと頭をしぼって考え、例えば、革マル派の如く、本質論→実体論→機能論という三段階理論にそって、独裁について考えていれば、プロレタリア権力の即時の樹立を主張しえたかのように言っているが、その実、彼等自身、「ソビエット労農同盟」をロシア革命の経験からひき出していることをどう説明するのであろうか。このような形而上学によるマルクス批判は、全くためにする批判であり、ブルジョア・デマゴーグのやり方なのである。

③革マル派の観念論とは全く正反対に、革命的マルクス・レーニン主義党の戦術は、具体的な階級の相互関係の具体的な分析、階級闘争の経験の総括から導かれる。それぞれの国のプロレタリアートがどのような道をたどりまたどのような政治形態で、プロレタリアートの独裁を実現するかは、個々の国の歴史的・具体的諸条件によって異っている。それはプロレタリアートとその党が現実の階級闘争の経験の総括の中から発見し、闘いとっていかねばならないものなのである。革マル派はこの革命的マルクス・レーニン主義の戦術に対する唯物論的態度を否定し、完全な形而上学からマルクスを批判することによって、民主主義革命の美化、プロレタリアートの独自性の実質上の否定を行なっているのである。

更に革マル派は党の問題について次のように言っている。

「第三の問題は、権力の実体構造に関する、統一戦線にかんする問題が、なお不明確であったということは、前衛党そのものの本質論的把握およびその組織化の論理が、なお確立されていなかった……共産主義を自覚したプロレタリアートをどう党に組織化するのかの論理がなお未解明であったがゆえに、党の他の政治勢力、諸政党への組織戦術の貫徹にかかわる問題が明確にされず、それゆえ「権力移動」という展望を提起することしかできなかったということなのである。」（同P二一一）

この「前衛党そのものの本質論的把握およびその組織化の論理がなお確立されていなかった」という主張は、結局、革マル派の「プロ的人間の論理」と「組織戦術」をマルクスが持っていなかったということにすぎないのであるが、ここでは、彼らはマルクス・レーニン主義の根本的な組織思想としての中央集権主義を否定し、プロレタリアはどのようにして共産主義者になるのか、従ってどのように共産主義者を創出していくのかという問題にすりかえ、しかも、このことを彼らのいわゆる「自覚の論理」の獲得として、問題にすることによって、このように主張しているのである。この点については、別稿の「革マル派の組織観の批判」で述べられているのでここではふれない。

以上のように、革マル派は、樹立すべき権力の、「本質論的解明」「実体論的解明」「機能論（現象論）的解明」また「前衛党の本質論的把握」「組織化の論理」という彼らのしつらえたハサミによって、マルクスの「呼びかけ」を裁断しているにすぎず、マルクス及び共産主義者同盟が当時置かれていた具体的・歴史的な条件の分析と総括を放棄した上で全く言いがかり以外の何物でもないようなマルクス批判を行なっているにすぎない。

㋺ マルクスの戦術に対する態度

我々はここで当時の共産主義者同盟の党内闘争が何をめぐって闘われていたのかを明らかにし、それを前提としてマルクスが述べている戦術に対する態度を概観しておこう。長くなるので党内闘争についてはマルクスの見解のみを引用し、彼に対立していた傾向を代表したシャッパーについては引用しない。（「マル・エン全集」八巻参照）

マルクス……「ほかならぬ「来るべき革命におけるドイツプロレタリアートの立場」という問題についての最近の討論では、この前の前の回状に、それどころか「宣言」にすら、まっこうから対立する意見が中央委員会の少数派に属する人達によって述べられた。『宣言』の普遍的な見解の代わりに、ドイツの民族的見解が主張され、ドイツの手工業者の国民感情にこびへつらっている。『宣言』の唯物論的見地の代わりに、観念論的な見地が主張されている。現実の諸関係ではなくて意志が革命の眼目だと主張されている。われわれは労働者にこういっている。『諸君は諸関係を変え、諸君自身が支配能力をもつようになるために、なお一五年、二〇年、五〇年間というもの、内乱をとおらなければならない。』と。ところが諸君はこう言っている。『われわれはただちに政権をにぎらなければならない。それができなければ寝てしまってもかまわない』と。民主主義者が『人民』ということばをたんなる空文句としてつかってきたように、いまでは『プロレタリアート』ということばがたんなる空文句として使われている。この空文句を実行するためには、すべての小ブルジョアをプロレタリアと宣言し、したがって実際にはプロレタリアではなく、小ブルジョアを代表しなければならなくなるであろう。真の革命的発展を革命という空文句とすりかえねばならなくなるだろう。」（「全集」八巻P五八三）

対立はこのようであった。「来るべき革命におけるドイツプロレタリアートの立場」という問題について、ただちに政権をにぎらねばならない」と主張する立場がいかなる政治的見地を意味せざるを得ないのかそれがこの論争における眼目であった。そしてこの「来るべき革命におけるドイツプロレタリアート」の綱領上の、組織上の見地の独自性を確保し、その上での「来るべき革命における」プロレタリアートの党の戦術を述べたのが「呼びかけ」であった。

再び「呼びかけ」に戻ろう。マルクスはこう述べている。

「小ブルジョア民主党にたいする革命的労働者党の関係はこうだ——すなわち、革命的労働者党はその打倒をめざしている分派に対抗して、この小ブルジョア的民主党と提携するが、民主党がそれによって自分自身の利益になるように自分の地位をはかる問題では、ことごとくこの民主党と対立するものである。」（「呼びかけ」）

「われわれにとって問題となりうるのは、私的所有の変更ではなくてその廃止だけであり、階級対立のごまかしではなくて階級の廃止であり、現在の社会の改善ではなくて新しい社会の建設である。革命のこんごの発展のあいだに、小ブルジョア的民主党が、ドイツで一時圧倒的な勢力をしめるであろうということは、すこしもうたがいのないことである。したがって、つぎのような場合に、彼らにたいするプロレタリアートの、そしてとくに同盟の態度がどうであるべきかが、問題になる。」（「同」）

「（小ブルジョア民主主義者達は）やがて勝利が決定されるやいなや、この勝利をわがものにし、労働者にむかって平静さをたもちその仕事にかえることをうながしいわゆる行きすぎをいましめ、プロレタリアートを勝利からしめだそうとするであろう。小ブルジョア民主主義者たちがこうした態度に出るのをふせぐことは労働者の力のおよぶところではないが、彼らが武装したプロレタリアートに対抗するのを困難にし、ブルジョア民主主義者の支配が当初から自分のなかに没落因子をもち、やがてプロレタリアートの支配によって彼らを駆逐するのをいちじるしく容易にするよう条件を彼らにつきつけることは、労働者の力でできることである。」（同）

「しかし、勝利の最初の瞬間から労働者をうらぎりはじめるであろうこの党にたいして、精神的にかつ威嚇的に対抗できるためには労働者は武装し、かつ組織されていなければならない。燧発銃、施条銃、大砲、弾薬をもってする全プロレタリアートの武装が即時実行されなければならない。労働者に向けられた旧市民軍の復活には反対しなければならない」（同）

マルクスは、ここで、権力を再び握った封建的党派とその同盟者である自由主義的ブルジョアジーに対して、革命的労働者党は、小ブルジョア的民主党と共に進む、しかし、いったん彼らが権力を握るやいなや、その経済的地位の従って階級的利害の根本的ちがいに規定されて、小ブルジョア的民主党と革命的労働者党は対抗せざるを得ない。だから革命的労働者党は、小ブルジョア的民主党に対して、綱領上、組織上の独自性を確保しつつ、当面する民主主義革命で獲得される団結とその成果をプロレタリア共産主義革命のために利用し、民主主義者の提議を極度にまでおしすすめ、ありとあらゆる機会に、労働者階級としての独自の要求をかかげることによってブルジョア民主主義者の没落を促進し、プロレタリア権力の準備を容易にしなければならないと言っているのである。だが、シャッパーは当面する革命において、ともかくプロレタリアートが権力を握らねばならないと主張し、そのことによって共産主義者同盟の綱領上の見地を投げ捨て、その結果、プロレタリアートとその党の党派性を小ブルジョアへ解体しようとしたのである。我々は以上のマルクスの当時の、戦術に対する態度の背後には、第一にプルードン批判としてある「哲学の貧困」「賃労働と資本」に示された資本主義批判があり、第二に「共産党宣言」に示された階級闘争に対するマルクス主義の原則があり、第三に共産主義者同盟の前身であった義人同盟の秘密結社的な手工業的組織観の中央集権主義思想にもとずいた改組があったことを指摘しうる。一方ヴィリヒ＝シャッパー派の戦術に対する態度の背後には第一に義人同盟の時期における分配の平等を要求した資本主義批判の残シがあり、第二に「現実の諸関係ではなくて意志が革命の眼目だ」とされた結果、国家と階級闘争に対する急進民主主義的態度に陥り、第三に組織的には、当時の戦術をめぐる対立を「文筆で仕事をする人達」と「それ以外で仕事をする人達」の対立として見、後者を自分の立場とする陰謀主義的な組織観が残存していただろうことを予想できる（エンゲルス、「共産主義者同盟の歴史」参照）だが、我々はシャッパーについては、現在のところ充分な文献と資料を手中にしていないので、以上の如き戦術をめぐる党内闘争の背後にあった資本主義批判、組織観については具体的に述べることができない。ここでは革マル派のマルクス批判が、彼等の頭の中の産物としての論理の枠組（それは、当然にも、彼等の実生活におけるブルジョア・イデオロギーへの屈服の反映なのだが）からの、マルクス「呼びかけ」の恣意的な裁断であり、シャッパー以下的な代物である（なぜなら、シャッパーは単に空論を唱えるだけではなく、革命の妨害者としてあらわれたに違いないから）ことを確認しておけば充分である。

(b) レーニン「二つの戦術」

㋑ 革マル派のレーニン批判

一九〇三年にロシア社会民主党はボルシェヴィキとメンシェヴィキとに分裂した。レーニンは一九〇五年の革命の勃発という条件の下で、ロシア社会民主労働党第三回大会「臨時革命政府についての決議」にもとづいて、メンシェヴィキの「協議会」の決議を批判するために「民主主義革命における社会民主党の二つの戦術」を書いた。我々は、この「二つの戦術」に対する革マル派の批判を検討することにしよう。革マル派は結局のところ、レーニンが次のように述べていることを批判しているのである。

「決議は、最少限綱領の実現を臨時革命政府の任務とすることによって、最大限綱領の即時実施とか、社会主義的変革のための権力奪取とかいう、ばかげた半無政府主義的思想を排撃していることに注意しよう。ロシアの経済的発展の程度（客観的条件）とプロレタリアートの広い大衆の意識と組織の程度（客観的条件と不可分にむすびついた主観的条件）とは、労働者階級を即時完全に解放することを不可能にしている。」（「二つの戦術」第二章）

革マル派はこのレーニンの主張を第一に次の様に批判している。

「資本制生産の帝国主義段階において実現されるべきいっさいの革命の本質はプロレタリアート独裁にある。」（「ロシア革命と反スターリニズム」P三四）

そして、レーニンにはこの当時「後進国ロシア帝国主義段階への認識、分析の欠如」（同P三五）があり、かつ「ツアー権力＝ツアー専制君主制という把握」（同P三七）をしている。だが、「君主制絶対主義は封建制から資本制への過渡期に存在する権力である。けれども、帝国主義段階における後進国の権力をそのように規定することはできない。経済的下部構造に規定されてブルジョアジーの独裁の一形態（ツアー・ボナパルチスト権力）として規定されねばならない。」（同）

そしてこのレーニンのあやまりの根拠は、「歴史主義」だの「市場理論」だのであると述べる。

第二点目に革マル派は以下のようにレーニンを批判している。

「レーニンの『プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁』なる独裁論は、それゆえ唯一の独裁（プロレタリアート独裁）として実現されるべき革命の本質規定の問題と、㈠革命遂行過程における遂行主体（階級同盟、労農同盟）の組織化という組織戦術的問題㈡あるいは、プロレタリア独裁の直接的現象形態——たとえば労農政府、㈢その政府の機能（〝革命的民主主義〟）との混同であるといえるわけである。論理的にいうならば独裁論における実体論的、機能論的誤謬といわねばならない」（同P三四）

そして結局の所これはマルクスの「権力移動論」のあてはめだと述べている。

まず第一点に関していえば、革マル派は、「世界革命論（革命現実論）」（これは樹立する権力は国際的にどこの国においても本質的にプロレタリアート独裁だというものであるが）の適用という彼らの「革命論」の「背骨」を現実にあてはめることによって、現実そのものを彼らの頭の中で作りかえているのであり、かつその点からレーニンの「誤謬」を導き出しているのである。すなわち彼らは一八五〇年のドイツに革マル派の「世界革命論」を適用することによって、マルクスの主張を具体的歴史的に検討して批判することなく、勝手にドイツの権力をブルジョア権力とねつぞうし、樹立する権力はプロレタリアート独裁であると現実を頭の中で作りかえてしまった。革マル派もこの時はいかにも自信なげであった。だが、しかし一九〇五年に来るや今度は自信をもって「帝国主義段階において実現されるべきいっさいの革命の本質はプロレタリアートの独裁にある。」として、主張しているのである。そして「帝国主義段階における後進国の権力は……ブルジョアジーの独裁の一形態（ツアー・ボナパルチスト権力）として規定されねばならない。」としてロシアの当時の権力の性格を根拠にして、プロレタリア独裁権力の樹立を主張しているのである。

たしかに一九〇五年を境としたロシアにおける国家形態の絶対主義から近代ボナパルティズムへの移行を、「旧絶対主義の崩壊を隠蔽する外見的立憲主義」（エンゲルス「住宅問題」）の採用を根拠に主張する学者もいる。（例えば「絶対主義論」服部之総著作集第四巻。ボナパルティズムはブルジョアジーとプロレタリアートとの均衡の上に立つ国家形態であってどちらにしろ革マル派の如く「帝国主義段階における後進国の権力は」というように超一般的な物指しをふりまわしたり、ブルジョア独裁の一形態とするのは誤り。）だが、エンゲルスは一八七二年「住宅問題」においてプロシアにおけるボナパルト的王制への移行を指摘した後、一八九一年、「エルフルト綱領草案の批判の付録」において次のように言っていることを忘れてはならない。

「一〇、（略）。しかしながら人類……のためのその闘争においてそれ（社会民主党）は、ドイツのその他の政治的秩序によってさまたげられている。それ（党）はなによりもまず自分自身のために運動の自由をたたかいとり、封建制と絶対主義とのおびただしい残

トロツキーは、プロレタリアートが地主の土地を没収し、君主制を打倒するために、農村の非プロレタリア大衆をひきつけるならこれこそ、ロシアにおける『国民的ブルジョア革命』の完成であり、これこそ、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁であるということを、考えなかったのだ！」（「革命の二つの方向について」全集二一巻四三二～四三三Ｐ）

このようにレーニンは決して、「帝国主義段階の認識の欠如」によって民主主義革命を主張したのではない。レーニンは一九一五年の段階では明確に帝国主義としての国際的な資本主義の発展を踏まえて、なおロシアにおける具体的な階級の相互関係の分析の上に立って、民主主義革命を主張しているのである。

革マル派は自らの「世界革命論（革命現実論）」なる形而上学の窓から、具体的なロシアの階級闘争の経験を歪めて見ることによってボナパルティズムとか帝国主義とかいう言葉をもてあそんでいるにすぎないのである。

革マル派のレーニン批判の第二点、レーニンは実現される革命の本質規定（プロレタリアート独裁）と革命遂行主体（労農同盟）の組織化を混同しているという主張―労農政府はプロレタリアート独裁の現象形態であり、労農政府は機能として革命的民主主義を行うにすぎないという主張を次に批判していこう。

レーニンは革マル派の主張を即座にしりぞけて次のように言っている。

「プロレタリアートは、実力で専制政治の反抗をおしつぶし、ブルジョアジーの動揺性を麻痺させるために、農民大衆を引きつけて民主主義的変革を最後まで遂行しなければならない。プロレタリアートは、実力でブルジョアジーの抵抗を撃破し、農民と小ブルジョアジーの動揺を麻痺させるために半プロレタリアの大衆を味方にひきつけて社会主義的変革を完成しなければならない」（「二つの戦術」）レーニンは民主主義革命において、プロレタリアートが「農民大衆をひきつけ」なくてはならないことを述べているが、社会主義革命については、「半プロレタリアの大衆（具体的には貧農―引用者）を味方にひきつけて」と述べているのである。ところが革マル派はプロレタリア革命の遂行主体が労働者と農民一般であって、労農政府はプロレタリアート独裁の現象形態だなどと述べている。まさに革マル派は民主主義革命を社会主義革命だとして美化しているのであって、革マル派のこのような見解はプロレタリアートの党派性を小ブルジョアに売り渡し、プロレタリアートの独裁を実際上否定するものなのである。革マル派の空論の正体はこうして簡単に明らかになった。彼らは結局、日本共産党宮本一派と同じく、純粋民主主義の社会主義への転化を待望しているにすぎない。彼等と日本共産党宮本一派との相異は、日本共産党が議会主義の道を進んでいるのに対し、革マル派の戦術は今のところ、ゼネスト革命論＝ソビエト主義にあるということにあるのみである。

㋺ レーニンの「戦術＝過程論」批判

革マル派の正体はこうしてトロツキー以下的、メンシェヴィキ的なものでしかないのであるが、レーニンは彼等のような分子に対して次の様に批判しているから、革マル派の諸君は良く聞きたまえ。

「哲学者たちは、世界をいろいろと解釈しただけであった。しかしこの世界を変革することが問題なのだとマルクスはいった。新イスクラ派も、彼らの眼前に進行している闘争の過程を、どうやらがまんできる程度に描写し、説明することはできる。しかし、この闘争のさいのただしいスローガンをあたえることは全くできない。」（「二つの戦術」四章）

「経済主義者たちはすぐ、（1）権利獲得の闘争、（2）政治的煽動（3）政治闘争という順序でか、それとも、（1）十時間労働制、（2）九時間労働制（3）八時間労働制という順序でか、ともかく「段階論」をやったものだ。こういう『戦術＝過程論』からどういう結果がえられたかは、すべての人に十分知られていることである。ところがいま、われわれにむかって、革命もまたあらかじめきちんと段階にわけよ、という提議がなされている。すなわち、一ツァーリが代議機関を召集する。二、この代議機関が『人民』の圧力をうけて憲法制定議会を組織することを決定する。三、……第三の段階については、メンシェヴィキはまだ話し合いがついていない。」（同三章）

革マル派は自分達は組織戦術をもっているから、「戦術＝過程論」ではないと弁解するかも知れない。だが革マル派の組織戦術なるものは、「戦術＝過程論」としての自らの追随主義を合理化するためのものでしかないのだ。そしてこの合理化によって、彼等は単なる日和見主義から社会帝国主義に転化したのである。

「社会民主党が、形式的『自主性』をたもっているにもかかわらず、事実のうえでは、自主的なものでなくなり、事件の進行に自己のプロレタリア的自主性の刻印をおすことができず、全体として、結局において、最後の決算ではブルジョア民主主義への『解消』がやはり歴史的事実になるほど無力化してしまうという、そういう革命の最後的決算が出てくるかもしれない。ここにこそ、現実の危険がある。」（「二つの戦術」六章）

「新イスクラ派の同志諸君……諸君の政治哲学が、オスヴォボジェニエ派（自由主義的ブルジョアジーの一分派――筆者）哲学の焼きなおしになっていることを、また諸君が（諸君の意志に反して、意識しないうちに）君主主義的ブルジョアジーの尻馬にのってしまったことを諸君は理解するだろうか？」（同八章）

革マル派の組織戦術の反動性についても、レーニンはこのようにちゃんと批判している。メンシェヴィキの戦術が結局のところ自由主義的ブルジョアジーの戦術へのプロレタリアートの屈服を導くものでしかなかったのと同じようにマルクス及びレーニンの時代にまでさかのぼって民主主義革命を社会主義革命として一貫して美化する革マル派の戦術に対する態度は今日においては日本共産党宮本一派の戦術へのプロレタリアートの屈服を導くものなのである。

レーニンの「二つの戦術」における以上のような追随主義批判、革命主義の立場は、ロシヤ社会民主労働党綱領における、次の様な革命党についての原則的観点を堅持したところからもたらされた。

「プロレタリアートにその偉大な歴史的使命をはたす能力を獲得させることを自己の任務とする国際社会民主主義は、プロレタリアートをすべてのブルジョア政党に対立する独自の政党に組織し、プロレタリアートの階級闘争のいっさいの現れを指導し、搾取者の利益と被搾取者の利益とが和解しえないように対立していることをプロレタリアートのまえに暴露し、きたるべき社会革命の歴史的意義と必要な諸条件とを彼らにたいして明らかにする。」（「ロシア社会民主労働党綱領」傍点筆者）

そしてレーニンはこの観点から「何をなすべきか」で、労働組合主義的な意識が労働者の日常的意識にほかならず、党は労働者と雇主の関係の圏外から労働者へ社会民主主義意識を外部注入しなければならないこと。すなわち共産主義的要求で労働者階級を組織し武装しなければならないことを明らかにしたのである。そしてそのことによってプロレタリアート独裁を一九〇二年の現在から準備する組織計画を提出したのである。それはレーニンがマルクス・レーニン主義の組織に関する根本思想である中央集権主義を党の指導の中央集権化、党への責任の地方分散化として具体化したことを意味していた。だがロシア社会民主党二回大会において組織―人事問題をめぐってイスクラ派も分裂し、イスクラ少数派はサークル根性を持ってボルシェビイキに対抗し、結局経済主義者の立場と軌を一にしたのである。すなわち組織についての中央集権主義の思想はプロレタリアート独裁の思想であり、中央集権主義の思想の否定はプロレタリアート独裁を現在から準備することの否定につながらざるを得ず、それは共産主義的要求をもって労働者階級を組織し、武装させることの否定であり、「戦術＝過程論」にいきつく以外にないのだということである。

「戦術＝過程論」によれば、党は、「労働者と資本家の利益が非和解的に対立していることを、労働者に暴露」する必要がなくなり従って階級闘争の究極目標について、その諸条件について語る必要がなくなり、すなわち労働者階級を共産主義的要求で組織し、武装しプロレタリアート独裁を現在から準備する必要がなくなる。「戦術＝過程論者」は、労働者の日常的闘争（経済闘争、民主主義闘争）を指導していればよく、ただ大衆と異って階級闘争の発展過程を思い描いていれば良いわけである。

我々は、レーニンがマルクスの戦術についての態度を継承したことを明らかにした。更にメンシェヴィキの戦術についての態度は「戦術＝過程論」であり、ロシア社会民主党をブルジョア民主主義へ解消させるものであったことを明らかにした。革マル派のレーニン「二つの戦術」への批判は一九〇五年当時のロシアの現実を何ら歴史的、具体的に分析しないことによってレーニンの戦術に対する態度に敵対し、かつ、プロレタリアート独裁の「実体」が労農同盟であるということによって、プロレタリアートの党派性を小ブルジョアジーに売り渡しプロレタリアート独裁を否定するものであった。さかのぼれば彼らはこの労農同盟論によってマルクスの「呼びかけ」をも批判したのであった。こうして革マル派の戦術に対する態度は実は全く純粋民主主義的なものであり「戦術＝過程論」の枠内にあることが明らかになった。次に我々は革マル派のトロツキーに対する評価を分析することによって彼等の正体をより具体的に暴露していこう。

(c) トロツキーの「結果と展望」と「過渡的綱領」

㋑ 革マル派のトロツキー批判

「一九〇五年革命・結果と展望」（以後「結果と展望」）において当面するロシア革命についてプロレタリアート独裁を主張し、民主主義的変革の社会主義的変革への転化を主張したトロツキーについて見ていこう。革マル派のトロツキー批判は以下の如くである。

(一)、「ブルジョア民主主義的任務の遂行からプロレタリア革命への発展を、きたるべき革命期における階級闘争の政治力学に関する予測からもっぱら導き出そうとするのは、トロツキー永続革命論の現象論的本質を示すものである」（「ロシア革命と反スターリニズム」P七）

(二)、「現在的、場所的に解明さるべき『革命闘争の発展』の問題を、トロツキーがこのように革命の歴史的発展からの類推によって導き出そうとすることは、一方では、トロツキーにおいて実践的立場、場所的立場が完全に欠落してしまっていることを意味するものである。と同時に他方では、マルクス後進国革命論を世界革命論、プロ独裁論との関係において批判的に再構成するという問題意識が、トロツキーにおいて希薄であるということをも意味している。」（同P八）

(三)、「トロツキーにあっては、プロレタリア権力の機能＝政策の特徴からプロレタリア党の戦術の永続的関係を説明するという、全く逆倒した方法がとられてしまっている。」（同P九）

我々は(一)、(二)については紙面の関係上革マル派の積極的見解を引用しなかったが、結論的には、(一)について革マル派はトロツキーにおける「組織戦術」の欠落を指摘し、(三)についてはトロツキーにおける「戦略」の欠落を指摘する。

(一)の「階級闘争の政治力学に関する予測」というトロツキーに対する革マル派の批判は一応あたっている。即ち、トロツキーは当面の革命の展開の見透しをブルジョア民主主義的任務から社会主義的任務への発展として描いている。我々はこのような革命の展開の見透しをトロツキーが述べざるを得なかったのは、彼がプロレタリアートの革命党の独自の組織化によって、民主主義革命にプロレタリア的な刻印を押そうとした、レーニンの戦術に対する態度を理解することなく、「戦術＝過程論」の枠内にあったからと考えている。ところが、革マル派は自らもまたトロツキーと同様に「戦術＝過程論」の枠内にいるためにトロツキーの戦術に対する態度をそれ自体として批判するのではなく、「組織戦術」の欠落として組織問題へと論点をすりかえるのである。そして、この「組織戦術」たるや、中央集権主義の組織思想とは縁もゆかりもないところの組合主義と個人主義の雑スイとしての革マル派的形而上学のつめこみにすぎないのであり、トロツキーより更に悪いかたちでの革マル派のメンシェヴィキ的追随主義の合理化にすぎず、革マル派の社会帝国主義への転化をもたらした根拠の一つなのである。

(二)の部分で、革マル派が言いたいことは以下である。トロツキーは「帝国主義段階への突入の直感」をもっていたにもかかわらず、帝国主義段階に自己がいるという実践的・場所的立場がふまえられていない。その結果、帝国主義段階において樹立すべき一切の権力はプロレタリアート独裁であり、それとの関係で民主主義的任務も位置ずけるべきであるのに、民主主義的任務から社会主義的任務への発展として当面の革命をとらえてしまっている。かつまた、その論拠を一七八九年のフランス革命一八四八年のフランス、ドイツ、オーストリア等の革命、一九〇五年ロシア革命に於るプロレタリアートの役割の比重の増大から当面の革命におけるプロレタリアートの役割の一層の増大を予測するというかたちでつくりあげている……うんぬん。」

確かに、革マル派が指摘するようにトロツキーは、階級闘争の一般的発展、プロレタリアートの占める役割の増大の予測から、自己の理論を導き出している。だが、トロツキーはそこから、民主主義的任務から社会主義的任務への発展という結論を導き出したのではなく、プロレタリアートの農民に対するヘゲモニー＝プロレタリアート独裁という見解を導き出したのである。ところが、革マル派はこのトロツキーの「結果と展望」の最大の誤謬をトロツキーと共有し、トロツキーの民主主義的任務から社会主義的任務への発展という考えを批判するのである。だがトロツキーのその主張は、彼なりにロシアの当時の具体的な階級闘争の現実（彼も承認していたロシア社会民主党綱領に示される）をふまえていたことを示しているのであり、トロツキーは、革マル派の如くにはロシアの階級闘争を歪曲して分析しなかったのである。我々は以下で革マル派がトロツキーと共有している「労働者と農民の独裁＝プロレタリアートの独裁」という誤りを具体的に批判し、またトロツキーの「社会主義的な変革」の内容そのものも批判しよう。

(三)の革マル派のトロツキーに対する批判は全くあやまっている。トロツキーは「プロレタリア権力の…政策から…戦術の永続的関係」を説明しているのでは全くないのである。トロツキーが永続革命といったのは、民主主義的任務から社会主義的任務へ発展するという過程をさしている。そしてこのような過程の見透しを語り、また樹立する権力の内部での労働者階級の農民へのヘゲモニーを語ることによってそれをプロレタリアート独裁として規定し、そして彼の調停主義的な組織的立場ゆえに、トロツキーは独自の戦術を提出することができなかったのである。トロツキーにとって永続革命は現実においては一九一七年二月から始まったのであり、それ以前において彼の「永続革命」論はロシア階級闘争において何らかの役割を果たしたことはない。革マル派は「戦略」の欠落などとトロツキーを批判していっているがこれは全く批判になっていないのである。

結局、革マル派のトロツキー批判は、「組織戦術」の欠落ということにつきるのであり、このトロツキー批判は革マル派がトロツキーの誤りを更に悪いかたちで拡大する根拠となっている。

㋺ トロツキーの「結果と展望」

さて、我々は少しのあいだ、革マル派とは別個に我々自身でトロツキーの主張を自主的に検討してみよう。トロツキーは「結果と展望」においてレーニンの労農独裁論を批判して次のように言っている。

「このような協働（「プロレタリアートと農民の独裁」）は、農民が自己を現存のブルジョア諸政党の一つと同一視しているのか、または自身の強力な政党を形成していることを必要条件とする。われわれがすでに指摘しようとしたように、そのいずれも不可能である。」（「結果と展望」P二六）

このようにトロツキーは、農民は、ブルジョア諸政党を支持することにならないし、また独自の政党を作ることも不可能であるからプロレタリアートと農民の独裁は不可能であり、プロレタリアートの独裁だと述べた。だが彼はあとで、「十月の教訓」（一九二四年）で、もし一九一四年に革命が起きていたならばと仮定して、「もっともありうべきことは農民革命の第一段階はナロードニキの旗のもとに起っただろう。」（同P一九）と述べるのである。明らかにここではトロツキーの「プロレタリアート独裁」という主張の根拠は消えさることになるのだが、だがそれはトロツキーが「プロレタリアートの独裁」として主張したその論拠そのものが変更されていることを意味しない。それはいわゆる「ヘゲモニー」であった。

「もちろん諸君はこうした政府を、『労働者と農民の独裁』とか『プロレタリアートと農民とインテリゲンチャの独裁』とか『労働者と下層中産階級の革命的政府』とか呼ぶことができる。しかし次の問題が残るであろう。誰が政府の中で、そしてそれによって国の中で、ヘゲモニーをとっているのか？労働者階級について語るとき、われわれは、ヘゲモニーが労働者階級に属していることを意味しているのである。」（「トロツキー選集五巻」P二四）

トロツキーはここで「ヘゲモニー」一般について述べているが、何についてのヘゲモニーなのかを述べていない。民主主義革命に於るプロレタリアートの農民に対する指導性であれば、それはボルシェビィキも認めている。それはかりではなく、断固として農民を引きつけることを主張している。だが社会主義革命ということであれば、農民とプロレタリアートの経済的地位は異なっており、そのためにプロレタリアートと農民は対抗せざるを得ないのである。だからプロレタリアートと農民が権力を握っているということは、そこにおいてプロレタリアートが多数を占め、かつその主導性を持っていたとしても、それは民主主義革命に於る主導性であって、その限りで農民が独自の政党を持とうが持つまいが、プロレタリアートと農民の独裁でなければならないのである。そしてプロレタリアートが社会主義革命へ突き進むためにはプロレタリアートと農民の独裁権力はプロレタリアートの独裁権力へと改組されねばならないのである。このようにトロツキーは「ヘゲモニー」という言葉によって農民とプロレタリアートの経済的地位のちがい、プロレタリアートの党派性を覆い隠しているのである。革マル派は、トロツキーがその「ヘゲモニー」論を階級闘争の歴史的な発展の彼なりの総括から述べたのに対し、本質＝プロレタリアート独裁、実体＝労農同盟として観念論的に改作する事によって、トロツキーと同じ誤りを更に悪いかたちで犯しているのである。

更に、トロツキーは民主主義的任務と社会主義的任務について、次のように言っている。

「社会民主主義は、一方でプロレタリアートのために最少限綱領の全体を実施し、他方でブルジョアジーのために厳密にこの綱領の限界内にとどまるという二重の義務のもとに権力をとるわけにはいかない。そのような二重の義務はけっして果されないであろう。無力な人質としてではなく、指導的な勢力として政府に参加した以上、労働者の代表はみずから最小限綱領と最大限綱領との境界をうちこわすであろう。集産主義が日程にのぼる。プロレタリアートがこの方向への進軍の過程のどの地点で停止させられるかということは、諸勢力の配置によるのであって、プロレタリア党の当初の目的によるのではない。」（同P三二）

更にトロッキーは次のように述べる。「（八時間労働日の実施、失業に対する措置をとるならば）資本家に残されている道はロック・アウトを宣言し、工場を閉鎖することだけであろう。生産が中断されたばあいには資本家は労働者よりながく耐えることができるのだから、労働者の政府に残されている道は、工場を接収し、その大規模なものにおいては国家または自治体による生産管理を導入することによって全面的ロック・アウトに対抗する以外にない。農業においては同様な問題は、土地の没収という事実そのものを通じて出現するであろう。プロレタリアートの政府が大私有地を大規模な農業生産物とともに没収し、それを小さく分割して小所有者に売却するような図を想像することはできない。プロレタリアートの政府にとって唯一のひらかれた道は、そうした私有地において自治体または国家の管理下に協同生産を組織することだからである。しかしこれは社会主義への道である。」（同P三二）

このように最少限綱領実施に対するブルジョアジーの抵抗に際する生産手段の没収に至るまでの処置、及び貴族、寺院、大地主の土地の没収、すなわち国有化をもってトロッキーはそれを社会主義への道とするのである。だがレーニンの見解はこうである

「国有化は、土地の所有者の、すなわち地代を受けとる権利の引渡しを意味するが、けっして土地そのものの引渡しを意味しはしない。国有化は、すべての農民が土地を、だれの手にであろうと自分の意志に反して引き渡すことをいささかも意味するものではない。……社会主義的変革は、土地の所有だけではなく、経営対象としての土地そのものを、社会全体の手にうつすことを意味する。」（「労働者党の農業綱領の改訂」）

以上の様にレーニンは土地の国有化をもって社会主義的方策の実施としては考えていない。それはブルジョア民主主義的変革の最大限であり、社会主義のための真の闘争の開始への必要で自然な一歩前進として述べているのである。同様に考えるならば、ブルジョアジーによる最少限綱領の実施に対するサボタージュに対してそれを強制し、かつそれでも抵抗する部分から生産手段をも没収するに至る強制手段を執行することも民主主義的変革の可能な最大限であり、かつ社会主義の闘争の開始への、必要で、自然な第一歩である。トロッキーは、例えば、土地の国有化が、それ自身では、民主主義的変革であることを知らないわけではないが、彼は、そこからすぐに「社会主義への道」をひき出してしまっており、結果として、民主主義的変革と社会主義的変革とを混同しているのである。このようにトロッキーは社会主義的方策についても誤った見解に陥っていたのである。そしてこのような主張によってトロッキーはある種の矛盾に到達する。

「農業的諸関係における封建制度の残存物の廃止は、今や地主たちによって圧迫されている全農民の支持を受けるであろう。累進所得税は、圧倒的多数の農民によって支持されるであろう。だが農村プロレタリアート（農場労働者）の擁護に関する立法措置は、農民の多数の間では積極的支持をみいださず、少数の間では積極的反対に出会うであろう。プロレタリアートは、階級闘争を農村にもちこみ、こうして疑いもなく農民全体を結合するあのわずかな利害の一致をも破壊せざるをえなくなるであろう。次の段階においてはプロレタリアートは、富農に対して貧農を、農業ブルジョアジーに対して農村プロレタリアートを援助することによって、支持を探し求めなければならないであろう。これは、農民の多数を労働者民主主義から離反させるであろう。農村と都市との関係は緊張したものとなるであろう。」（同三十）

「権力についたプロレタリアートは、たとえこのことがロシア・ブルジョア革命における諸勢力の一般的結合の結果にすぎないとしても、世界の反動の側からの組織的反対と、世界のプロレタリアートの側からの組織的支持とに出会うであろう。手持ちの手段だけでは、ロシア労働階級は、農民の援助を失う瞬間に、押しつぶされてしまうにちがいない。その政治的翻権の運命とロシア革命の運命とを結びつける以外に、ロシア労働階級には何も残されてはいない。」（同P五四）

つまりトロッキーはプロレタリアートは民主主義的任務から社会主義的任務へ短期間（直接的連続的に）に突き進まざるを得ないと予測しつつ、ロシア自身によってその成果は防衛できないとし、ヨーロッパ社会主義革命を救いの神とすることになってしまっているのである。一国の革命がプロレタリア世界共産主義革命の一環としてのみ勝利しうることを主張することは正しく、プロレタリア国際主義の原則にかなうものであるが、一国の革命の敗北からの救いの神として世界革命を語ることは、逆に言えば世界革命が勝利しなければ、一国の革命は敗北するということになり、敗北主義につながる誤りである。

ところが、トロッキーはロシア革命は社会主義革命に突き進まざるを得ないと主張しつつ、同時にそれはロシア一国では防衛しえないとするのである。トロッキーはプロレタリアートの独自性を党が代表するということについて理解できず革命の根本問題としての権力問題について理解していない。彼はプロレタリアートの階級としての行動を、全く経済主義的に「予測」してしまっている。つまりトロッキーもまたレーニンが批判した「戦術＝過程論」の枠内にあり、彼はそれを急進的に述べたがゆえにこのような矛盾に突き当らざるを得なかったのである。そしてこのようなトロッキーの戦術に対する態度の背後には二回大会に於るボルシェヴィキとメンシェヴィキの分裂時におけるトロッキーの調停主義的組織態度があった。

すなわち、長文の評論「われわれの政治的任務」の中で、トロッキーはレーニンをマルクス主義者ではなくジャコバン主義者であると批判して次のように言う。

「われわれの見るところでは、これらの方法の行きつくところは次のようになろう。党組織が階級にとってかわり、中央委員会が党組織にとって代り、最後には「独裁者」が中央委員会にとって代る」更に彼は社会主義的体制の諸問題は「社会主義内部の数多くの傾向の間の」自由競争を必要とすると述べて次のように言っている。

「しかし、この複雑な課題は、選ばれた人々の集団、いわんや生殺与奪の権で武装された一個人をプロレタリアートの上に置くことによって、解決されることはできない」

トロッキーがメンシェヴィキとたもとを分って以後一九一七年までは一貫してメンシェヴィキとボルシェヴィキの間の調停派として存在し続けた根本的な理由はこのようなトロッキーの組織観にあった。この様にボルシェヴィキとメンシェヴィキとの中間派、調停派に陥っていたトロッキーには、戦術とはプロレタリアートの党の政治態度であって革命党の党派性を現実の階級闘争の中に刻印すべきものであり、従って党派闘争を回避しては、その目的を達成することが出来ないところの党の政治的態度である事が理解できず、結局は「結果と展望」にみられるように階級の相互関係を経済主義的に把握した、革命の見透しを述べることがあたかも党の戦術であるかの様に思われたのである●

そしてこのような革命の見透しを語ることがあたかも党の戦術であるかのごとく考えたトロッキーは、ボルシェヴィキとメンシェヴィキに対する独自の戦術を提出することができず、一定の有能なインテリゲンチャを組織するにとどまったのである。

結局トロッキーはプロレタリアートの当面の要求としては最少限綱領を認めつつもプロレタリア独裁への革命の発展を語るという自己矛盾におちいることによって、レーニンにからかわれる破目になったのであった。

後に第四インター結成の際トロッキーは以上のような「結果と展望」における彼の破産を彼なりに総括し、そのことによって、彼の戦術に対する態度の誤りを更に純化することになった。いわゆる「過渡的綱領」が、それであるが、我々はついでに、これについても次に若干ふれておこう。

（八）トロツキーの「過渡的綱領」

「過渡的綱領」の中でトロッキーは、「古典的社会民主主義」の綱領が革命を日程に上せていなかったことによって、最小限綱領と最大限綱領とに分けられていたことを批判し、最小限綱領と最大限綱領との間に「架け橋」が必要であることを主張して次のように言っている。

「…第四インターナショナルの戦略的任務は、資本主義の改良ではなくそれを打倒することにある。その政治目的は、ブルジョアジーの財産を没収するためにプロレタリアートが権力を獲得することである。しかしながら、この戦略的任務の達成は戦術上のいっさいの問題に――例えそれが小さな部分的なものであったとしても最も慎重な注意をはらうことなしには考えられない。……第四インターナショナルは、古い"最少限"要求の綱領が少なくともその重要な力の一部を保持しているかぎり、これを無視しない。第四インターナショナルは労働者の民主主義的諸権利と社会的既得の成果をあくまでも防衛する。だが第四インターナショナルは正しい現実的な、つまり革命的展望の枠内においてこの日々の活動を遂行する。大衆の古い部分的な"最小限"要求が退廃的資本主義の破壊的で退化的な諸傾向と衝突する限り――そして、それは一歩ごとに生起しているのだが――第四インターナショナルは過渡的要求の体系を提出する。この過渡的諸要求の体系の本質は、それがブルジョア体制の根底そのものに対してますます公然と決定的にむけられるという事実のうちにある。古い"最小限"綱領は、プロレタリア革命にむけて大衆を系統的に動員することを任務とする過渡的綱領にとってかわられる。」（「トロッキー著作集'38〜39上」P二四一〜二）

トロッキーは最大限綱領と最小限綱領の間に「架け橋」を作ってしまった。この「過渡的綱領」の根本的な欠陥は、これが、第四インターの綱領として提起されたものであるにもかかわらず、コミンテルン第六回大会綱領の根本的批判の上に立ったものではなく、何よりもその原則的部分に対する批判を欠落させていることである。

すなわち、トロッキーと第四インターは、第二インター系諸党派及び第三インター内スターリン派の統一戦線である人民戦線に対する過渡的要求の体系をもっての戦術上の左翼的補完物としての政治上の役割を占めるにとどまらざるを得なかったのである。

だが、結論を急がずに、最小限綱領と最大限綱領の「架け橋」というトロッキーの「過渡的要求」の体系を具体的に分析しよう。

トロッキーは、過渡的要求として、「賃金の物価上昇に対するスライディング」とか、「産業の労働者管理」とか、「基幹産業、銀行、信用制度の没収、国有化」とか、労働組合や工場委員会やソビエトについて語っている。だがこれらの要求は、例えば「賃金の物価上昇に対するスライディング」は、充分な程度に改良的な要求であるのに、ソビエトはそうではないといった具合に全然厳密に定式化されていない。総じてこれらは最小限綱領を急進化したものであって、民主主義的・改良的諸要求である。「大衆の古い部分的な"最小限"要求が退廃的資本主義の破壊的で退化的な諸傾向と衝突するかぎり」とされているようにトロッキーは第二インターの最小限綱領を認めた上で最小限綱領の急進化の上に、過渡的綱領を導き出しているのである。つまりトロッキーはプロレタリアートは最小限綱領的要求から闘いに立ち上り、闘争が発展するにつれて、過渡的要求を掲げて闘い、遂に最大限綱領的要求に行きつくといったふうに考えている。だからこそトロッキーは「過渡的綱領」を「架け橋」と考えたのである。これはまさに急進民主主義以外の何物でもない。しかもトロッキーは、共産主義革命が日程に上っていたドイツ及びヨーロッパ階級闘争に対してこのような主張を行なったのであるから、第四インターが第二インターにもスターリン派共産党にも勝利できなかったのは当然であった。（ロシアでは民主主義革命が社会主義革命に転化したのであって、当時のヨーロッパとは全く違う。当然にもレーニン「さしせまる破局それとどう闘うか」における過渡的要求と、トロッキー的過渡的綱領とは全く性格が違う。このことについては我々はすでに「烽火」派の批判において明らかにした。（「共産主義」16号参照）このような考えからすれば、トロッキーが「過渡的綱領」の中に以下のごとき政府要求を提出することもうなずけよう。

「労働者と農民に基礎をおき彼らの名において語るすべての党と組織に対して、ブルジョアジーと政治的に決別し、労働者と農民の政府のための闘争の道にはいれとわれわれは要求する。この道において、われわれは資本主義的反動に対して彼らを全面的に支持することを約束する。と同時に、われわれは"労働者と農民の政府"の綱領をなすものであるとわれわれが考えている過渡的諸要求を中心に疲れる事を知らない煽動を展開する…いずれにせよ……上に述べた意味での"労働者と農民の政府"が実際にうちたてられるとしても、それは真のプロレタリアート独裁への途上におけるほんの短い一つのエピソードでしかないだろう。」（「トロッキー著作集'38〜39上」P二六五〜六）

つまりトロッキーはここでプロレタリアート独裁とは異った政府を要求しているのである。一九〇五年のロシアでプロレタリアート独裁を要求したトロッキーがである。だが、これはレーニンの労農独裁論の完全な歪曲であり、結局一九〇五年のトロッキーの思想を引きついでいる。すなわち「労働者と農民の政府」は「労働者のヘゲモニー」の増大に従って「真のプロレタリア独裁」へと転化していくものとして考えられているのである。だがロシアでは民主主義的独裁と社会主義的独裁との混同としてあったトロッキーの急進民主主義は、ここでは更に悪いものになっている。なぜなら当時のヨーロッパ階級闘争はまさに、プロレタリア独裁の樹立へ向けた闘いを要求していたからであり、トロッキーは、純粋民主主義の社会主義への転化をとなえる修正主義に屈服しかかっているからである。

このように、トロッキーは、最少限綱領と最大限綱領をつなげ「架け橋」と称して、過渡的要求を提出することによって純粋民主主義の社会主義への転化の思想に傾いてしまったのである。そしてこのようなトロッキーの思想の背後には以下のごとき資本主義批判があった。

（三）トロツキーの資本主義批判

「生産手段の所有者たる資本家は労働力を買う。他のすべての商品と同様、労働力はそれが包含する労働の量、つまり、労働の維持と再生産に不可欠の生活資料の生産に必要な労働の量に応じて評価を受ける。しかし労働力なる商品の消費とは労働、つまり新たな価値の創造である。これらの価値は労働者が受けとり、生活維持のために消費する量よりも大きい。資本家は搾取せんがために労働力を買うのである。不平等の源泉はこの搾取である。」（「トロッキー選集補完三」P一七）

トロッキーはここで剰余価値の生産を労働力商品の社会的な自然属性として語ってしまい、このことから経済的不平等の原因として搾取を説明してしまっている。つまりトロッキーは、まず第一に、資本家と労働者の経済的地位を経済的不平等として把握しているのであり、第二にその根拠を搾取に求め搾取を労働力商品の社会的自然属性から説明してしまっている。

だがすでに我々が明らかにしているごとく、マルクスは資本—賃労働関係は単に商品を生産し、剰余価値を生産するばかりでなく資本—賃労働関係それ自身をも再生産することを明らかにしたのであり労働と所有の分離を資本制的取得法則として明らかにしたのである。そしてこのことをふまえて生産手段の独占者に労働者階級が経済的に隷従している事を第一インター規約前文で述べたのである。だがトロッキーは資本—賃労働関係を搾取関係として把握することによって、労働者と資本家の経済的不平等を見ることとなるのである。だがこのように把握すると、資本主義が社会革命の物質的基礎を準備していることをトロツキーは次のように述べることになる。

「プロレタリア革命のための経済的前提条件はもはや資本主義のもとで可能な最高の成熟度に全般的に到達している。人類の生産諸力は停滞している。もはや新しい発明や改善も物質的富の水準を高めることができない。……ブルジョアジー自身、いかなる抜け道も見いだしていない、……プロレタリア革命のための客観的諸条件は"成熟"しているだけではない――それはいささか腐りはじめている。社会主義革命なしには、それも次の歴史的時期に起こらないとすれば、人類の全文化は破滅によって脅かされる。いまやプロレタリアートの出番なのであり、それも主としてその革命的前衛の出番なのである。人類の歴史的危機は革命的指導部の危機に還元される。」（「過渡的綱領」）

トロッキーもまた生産力が資本制的生産関係とあいいれなくなっているという公式の中に逃げ込み人類の破局から社会主義革命の不可避性を説明することとなる。だがこのような公式からは、資本主義は種々の矛盾を持っており、資本主義は駄目なのだという事を説明するのみであり、資本家階級と労働者階級の経済的利益が非和解的であり、階級対立の非和解性がますますあらわになっている社会的諸条件がますます成熟しており、労働者階級が社会革命を遂行しうる唯一の階級であり、そのために唯一共産主義運動と結合しうることを何等説明しえないのである。

そして以上のような資本主義批判によってトロッキーは労働者階級に対する資本家階級の支配の根拠として国家を述べるという国家に関する急進民主主義的見地に陥ることにもなっているのである。

このようにトロッキーは、労働者階級と資本家階級の経済的利害の非和解性を経済的不平等と見、国家を階級支配の根拠とするといった国家に対する民主主義的見地ゆえに、第二インターにおける最小限綱領と最大限綱領の分離を根本的に批判できず、独裁の問題をヘゲモニーの程度の問題と考えるといった結果をまねいているのである。そしてその事によって労働者階級が自らの経済的解放を大目的としなければならないし、労働者階級は現在から自らの経済的解放のために闘うことができることを理解できないのであり、最少限綱領→過渡的綱領→最大限綱領というような急進民主主義的な政治的態度となるのである。だからトロッキーは終生、労働者階級を共産主義的要求で組織し、武装することを理解できなかったのであり、従って共産主義革命のために民主主義闘争、民主的変革を利用しなければならないことを理解できなかったのである。

我々は以上でトロッキーの戦術に対する態度が、階級闘争、もしくは革命の発展過程を経済主義的に見透そうとする「戦術＝過程論」であり、その根底には、社民的な資本主義批判、急進民主主義的な階級闘争に対する態度、個人主義的＝連合主義的組織観があったことを指摘しえたと思う。だが革マル派は、労働者階級と農民の権力＝プロレタリアート独裁権力というトロッキーの「結果と展望」の時期の見解を共有し、トロッキーの戦術に対する態度を「きたるべき革命期における階級闘争の政治力学に関する予測からもっぱら導き出そうとする」と批判しつつ革マル派お手製の「組織戦術」の欠落を全く恣意的に、指摘するのみで、トロッキーの戦術に対する態度の根底にあった資本主義批判、階級闘争に対する急進民主主義的態度、個人主義的組織観を批判しえなかったのである。このことは革マル派が何らトロッキーを克服していないこと、むしろトロッキーの誤りを最悪のかたちで拡大することによって社会帝国主義へ転化していることを示しているのである。

（続く）

※　※　※　※　※